

令和4年度

研修集録

49



秋田県立秋田南高等学校
秋田県立秋田南高等学校中等部

南高の授業

校長 伊藤 雅和

今から5年前のことです。秋田北高校で県の研究指定である「探究活動等実践モデル校事業」に取り組みました。学習指導要領改訂を踏まえ、主体的・対話的で深い学びを先進的に実践研究し、成果を公開発表することを前提とする2年間の研究指定でした。共学化10年を経て「新生北高」の特色を授業の質を高めることでより鮮明に打ち出そうとしたこの試みは「学びに向かう生徒を育てる～チームでつくる『北高型授業』～」とテーマを定めてスタートしました。

「〇高型」という考え方には当初様々な意見がありました。授業を型（枠）にはめることになるのではないか…、授業のパターン化を招くのではないか…などなど。結局、「型」というのは授業構成の型ではなく、

- ・質の高い学習目標の設定
- ・目標をクリアするための効果的な活動の設定（特に個の活動の質を大事にする）
- ・評価（生徒による自己評価・授業者による評価）の明確化

といった生徒の学力を強化するための学習の要素を、各時間や各単元に適切かつ柔軟に盛り込むことである、という共通理解をもって各教科の授業研究が教科横断的に進められたのでした。

はたして「南高型授業」というものは存在するのでしょうか。

本校の特色は、南高独自の形に体系化された探究活動にあると思います。中等部3年次の「クリエイティブサイエンス」は、科学の面白さを体感し、その面白さをわかりやすく他に伝える経験として、高校での探究活動につながっています。高校1年次の「国際探究」は、経験値をもつ中入生と高入生とが切磋琢磨し成長する機会となっています。高校2・3年次の「総合探究」「学術探究」は大学での学びにつながるとともに、大学入試を乗り越える力をも高めています。これら体系化された探究活動が教科外に設定されていることが本校の特色です。探究活動は各教科の授業で育まれた学力を総合的に束ねる要とも言えます。

本校の授業に求められるものは何でしょうか。

いわゆる「南高の授業」の在り方について知恵を出し合うことが校内研修の主眼です。教科外に探究活動があるために、教科の授業に自由度がある分、質の高さが求められます。

最大公約数的に言えることは、教科の授業と探究活動とが、相互にその質を高め合う関係にある授業を実践することです。そのことが相乗的に生徒の学力を高めます。単に知識を問う学習に終始することなく、知的好奇心を高め、意義のある活動を通して、高質の成就感をもたらす授業。完成形がないだけに不断の取組が求められます。

目 次

卷頭言 「南高の授業」	校長 伊藤 雅和	1
I. 授業研修		
令和4年度秋田県教育庁中央教育事務所学校訪問		
社 会 科 (中)	武藤 貴史	4
保 健 体 育 科 (中)	櫻田 文人	13
	鎌田 拓也	
その他の授業研修		
地 歴 公 民 科 (高)	關 友明	21
数 学 科 (高)	虹川 玲子	30
理 科 (高)	大久保龍太	38
保 健 体 育 科 (高)	金森 康臣	44
英 語 科 (高)	原田 由佳	48
II. 校内研修		
実践的指導力習得研修	齊藤 智也	58
教育情報部オンライン授業研修（職員研修）	關 友明	62
III. 研修講座等受講報告		
道徳教育推進研修講座	松井 春菜	72
小・中学校特別活動研修講座	鎌田 拓也	73
講座「育成する資質・能力から考える美術の授業」	平野 則夫	74
講座「各教科等の指導における資質・能力の育成に 向けた言語活動の充実」	石井 淳	75
IV. 探究活動の取り組み		
スーパーグローバルハイスクール（SGH）ネットワーク事業について	關 友明	78
高1「国際探究」について	堀内 純子	89
高2「学術探究」について	伊藤 栄治	92
高2「総合探究」について	佐藤裕紀子	94
高3「学術探究」について	林 克至	95
高3「総合探究」について	木村 太郎	96
今年度のクリエイティブサイエンスを振り返って	工藤 道人	100
編集後記		104

I. 授業研修

第1学年3組 社会科学習指導案

実施日 9月21日（水）3校時
授業者 武藤 貴史
場 所 1年3組教室

1 単元名 古代国家の歩みと東アジア

2 単元（題材）の目標

- (1) 古代の日本の大きな流れを、東アジアの歴史を背景に、時代の特色を踏まえて理解するとともに、諸資料から歴史に関する様々な資料を効果的に調べまとめる技能を身に付けるようとする。
- (2) 古代の日本を大観して、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現する。
- (3) 古代の日本に関わる諸事象について、そこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養う。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・律令国家の確立に至るまでの過程、摂関政治などを基に、諸資料から歴史に関する様々な情報を効果的に調べまとめ、東アジアの文物や制度を積極的に取り入れながら国家の仕組みを整え、天皇や貴族による政治が行われたことを理解している。	・東アジアとの接触や交流と政治や文化の変化などに着目して、事象を相互に関連付けるなどして古代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現している。 ・古代の日本を大観して、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現している。	・古代の日本について、見通しをもって学習に取り組もうとし、学習を振り返りながら課題を追究しようとしている。 ・学習を振り返るとともに、次の学習へのつながりを見出そうとしている。

4 生徒と単元（題材）

(1) 単元（題材）観

本単元は、隋や唐といった強大な帝国が出現し、緊張が高まった東アジア世界の中で、東アジアの文物や制度を積極的に取り入れながら、国家の仕組みを整え、発展を遂げていったことを理解させることをねらいとした単元である。そのため、日本の動きだけに着目するのではなく、中国や朝鮮など東アジアの周辺諸国とのつながりを捉えることが重要である。様々な国の立場から考察することの意義に気付かせることができる単元だと言える。また、本単元の学習から、聖徳太子や聖武天皇、藤原道長といった小学校で学習してきた人物が多く登場する。小学校での学習内容の單なる繰り返しにならないよう、国内外の情勢を関連付けるなどして、小学校の学習成果を有効に活用することで、学ぶことの喜びを実感できるようにしたい。

(2) 生徒観

社会の授業に意欲的に取り組むことができる生徒が多く、8月に行った授業アンケートによれば、88%の生徒が「社会の授業は好き」と回答している。入学時から小グループでの話合いでは、積極的に意見交換を行いながら、合意形成を図ることができている。

しかし、級友の意見を聞くことだけに終始してしまう生徒が多く、級友の意見を聞いた上で自分の意見と比較することに課題が残っており、指導の工夫が必要である。

(3) 指導観

単元の特色や生徒の実態を踏まえ、立場や時代、国の違いなどに着目し、社会的事象を多面的・多角的に捉えさせることで、自分の意見と比較しながら、級友の意見を聞くことができるようとする。学習過程に問い合わせの発問を取り入れることで、自分の考えを再構成した

り、新たな疑問を見出したりすることができるような場を設けるようにしたい。また、自分の意見と級友の意見の違いを捉えやすくすることができるよう、思考ツールを活用し、思考の可視化を図りたい。

5 全体計画（総時数10時間）

	学習活動	評価規準	時数
1	<ul style="list-style-type: none"> ・古代東アジア世界を大観する。 ・隋や唐といった強大な帝国が成立した東アジア世界で、日本が侵略を受けずに発展を遂げることができた理由を予想し、単元を貫く課題を解決するための見通しを立てる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>単元を貫く学習課題 なぜ、日本は古代東アジア世界を生き残ることができたのだろうか。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・隋や唐といった強大な帝国が成立した東アジア世界を大観し、単元を貫く学習課題を解決するための見通しを立てている。 【主体的に学習に取り組む態度】 (観察、学習プリント) 	1
2 本時	<ul style="list-style-type: none"> ・資料から、聖徳太子の政治と当時の国内外の情勢を読み取り、厩戸皇子が聖徳太子と呼ばれるようになった功績について、考察し、表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・聖徳太子の政治について、推移や相互関係などに着目して、その意義を考察し、自分の考えをまとめることができる。 【思考・判断・表現】 (観察、学習プリント) 	1
3	<ul style="list-style-type: none"> ・資料から、唐が成立し、緊張が高まった東アジア世界で、朝廷が行った諸改革の目的について考察し、理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中央集権国家の成立を目指し、諸改革を行ったことを理解している。 【知識・技能】 (学習プリント) 	1
4	<ul style="list-style-type: none"> ・資料から、律令国家が成立したことによる社会への影響について、考察し、表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大宝律令の制定が、朝廷や民衆、貴族に与えた影響について考察し、自分の考えをまとめている。 【思考・判断・表現】 (観察、学習プリント) 	1

5	<ul style="list-style-type: none"> 資料から、社会不安への聖武天皇の対応を読み取り、社会に与えた影響について、考察し、表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> 墾田永年私財法を出し、仏教を重視した政策を行うことで、朝廷や民衆、貴族に与えた影響について考察し、自分の考えをまとめている。 <p>【思考・判断・表現】 (観察、学習プリント)</p>	1
6	<ul style="list-style-type: none"> 資料から、政治の立て直しを図ろうとした桓武天皇の対応を読み取り、社会に与えた影響について、考察し、表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> 遷都や律令制の立て直し、蝦夷征討を行うことで、社会に与えた影響について、考察し、自分の考えをまとめている。 <p>【思考・判断・表現】 (観察、学習プリント)</p>	1
7	<ul style="list-style-type: none"> 資料から、日本と唐の情勢について読み取り、遣唐使の派遣を停止した目的と影響について考察し、理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 唐の勢力が衰えたことから遣唐使の派遣を停止し、国風文化が生まれたことを理解している。 <p>【知識・技能】 (学習プリント)</p>	1
8	<ul style="list-style-type: none"> 資料から、藤原氏が権力を握った理由について考察し、理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 他の貴族を退け、天皇との外戚関係を築き、摂関政治を行うことで、藤原氏が権力を握ったことを理解している。【知識・技能】 (学習プリント) 	1
9	<ul style="list-style-type: none"> 今までの学習内容を踏まえ、日本が侵略を受けずに発展を遂げることができた理由について、考察し、表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> 古代の特色を観点別にまとめ、日本が侵略を受けずに発展を遂げることができた理由について、考察し、自分の考えをまとめている。 <p>【思考・判断・表現】 (学習プリント)</p> <ul style="list-style-type: none"> 単元の導入に立てた見通しを踏まえて、学習を振り返り、これからの学習や生活に生かすことを見出している。 <p>【主体的に学習に取り組む態度】 (振り返りプリント)</p>	2

6 単元構造図 【別紙】参照

7 本時の計画（2／10）

(1) ねらい（本時の目標）

- ・聖徳太子の政治について、推移や相互関係などに着目して、その意義を考察し、自分の考え方をまとめることができる。 【思考・判断・表現】

(2) 展開

段階	生徒の活動	学習形態	教師の支援	評価（方法）
導入 (5分)	<p>1 聖徳太子が本名ではなく、尊称であることを確認し、学習課題を設定する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 聖徳太子と呼ばれるようになった厩戸皇子の功績とは何か。 </div>	全体	<ul style="list-style-type: none"> ・「日本書紀」や「懷風藻」、歴史教科書における聖徳太子の記述を確認し、課題意識を高める。 	
展開 (40分)	<p>2 学習課題に対する予想を立てる。</p> <p>3 資料を活用して、学習課題に対する結論をまとめること。</p>	個 全体 個 グループ 全体	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校で学習してきたことを活用して、予想するよう指示する。 ・思考の可視化を図るためにクラゲチャートを活用する。 ・社会の変化や当時の国内外の情勢などに着目し、聖徳太子の政治の意義について考察するよう指示する。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-top: 10px;"> ・聖徳太子の政治の意義について、推移や相互関係などに着目し、関連付けるなどして考察し、自分の考えを文章でまとめることができる。（学習プリント） </div>
まとめ (5分)	4 本時を振り返り、次時の学習内容について確認する。	個 全体	<ul style="list-style-type: none"> ・単元を貫く課題に照らして、振り返るよう指示する。 	

8 協議の視点

- (1) 他者の様々な意見に触れ、自分の考えを広げたり、課題について多面的・多角的に考えたりする場が設定されていたかどうか。
- (2) ねらいを達成する上で、思考ツールの活用は有効であったか。

6. 単元構造図

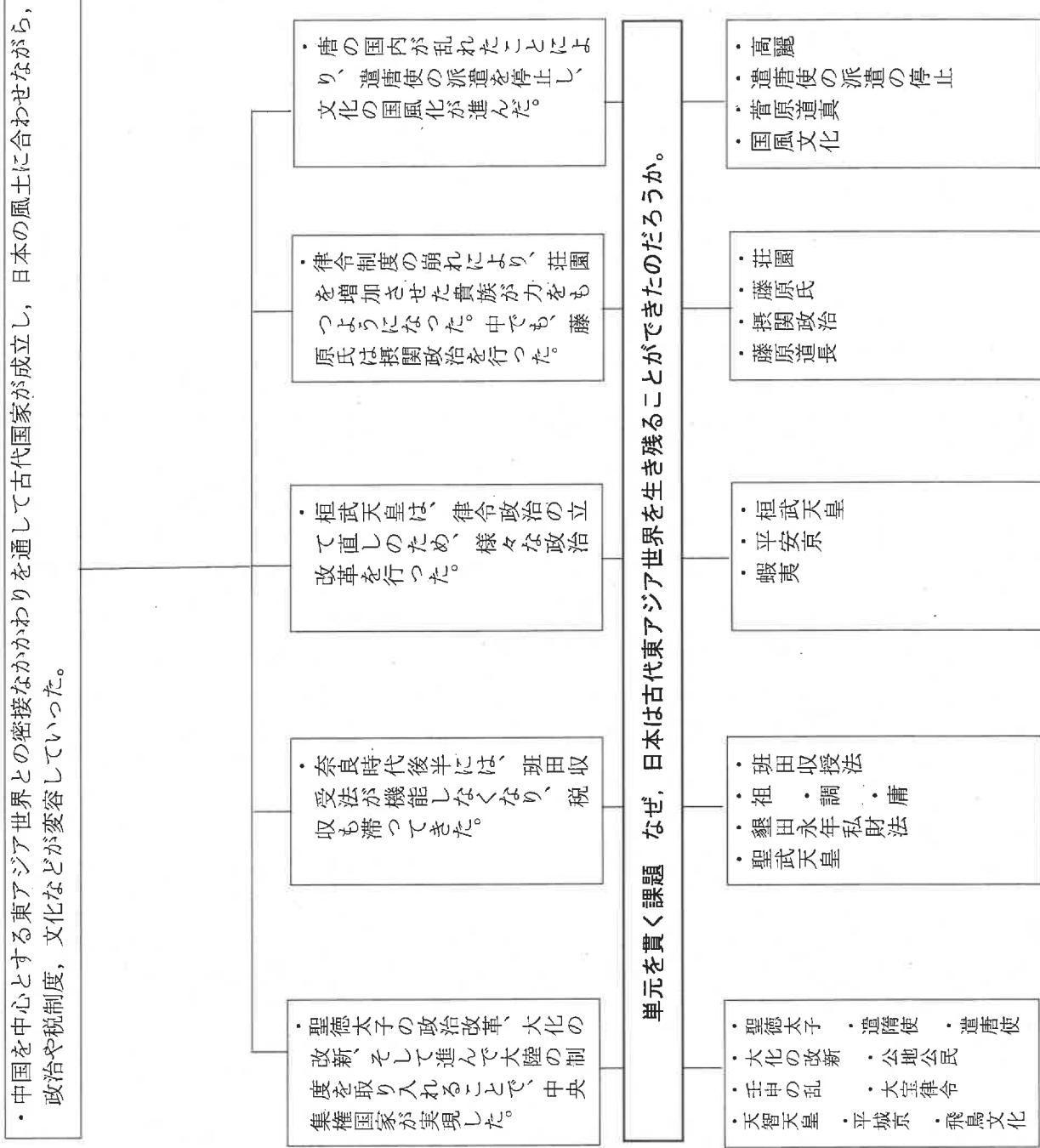
歴史的分野 「古代国家の歩みと東アジア」

- ・中国を中心とする東アジア世界との密接なかかわりを通して古代国家が成立し、日本の風土に合わせながら、政治や税制度、文化などが変容していった。

概念的知識

説明的・具体的知識

用語的・語句的知識



令和4年度 秋田県教育庁中央教育事務所 学校訪問

計画訪問 1年3組 社会科 授業者 武藤貴史

指導助言 津島 穣 指導主事

・協議の視点の確認

- (1) 他者の様々な意見に触れ、自分の考えを広げたり、課題について多面的・多角的に考えたりする場が設定されていたかどうか。
- (2) ねらいを達成する上で、思考ツールの活用は有効であったか。

・授業説明

武藤

小学校では、人物で歴史を学習することがある。毎回1年生を担当して思うことであるが、授業を構想するにあたり、小学校の繰り返しにならないように気を付けている。

生徒については、社会の授業に意欲的に取り組むことができる生徒が多い。グループでの話し合いでは、他者と活発に意見交換を行うといった一生懸命な姿が見られる。しかし、他者の意見を聞いてから、さらに考えることや、複数の資料を見て考えることについては、まだ課題がある。

古代の学習は、東アジアの国に目を向けながら授業を進めていったが、他の国の歴史と日本の歴史を関連付けて学習していくことを頑張らせたいと思っている。

聖徳太子がどのような国づくりをしたかについて、小学校では、天皇を中心に国づくりをしたこと学習しているので、その繰り返しにならないように、「なぜ、聖徳太子という尊称がつけられたのだろうか?」という問い合わせから、「厩戸皇子が聖徳太子と呼ばれるようになった功績とは?」を本時の学習課題に設定した。「厩戸皇子の功績」について、クラゲチャートを使って考えさせた。しかし、思考ツールとしてのクラゲチャートを使い慣れていない生徒が多く、今後、もっと使用して慣れさせたい。

授業で扱いたいことが多かったため、時間配分がうまくいかず計画的に進めればよかったです。文章表現をさせる時間や、まとめの時間をもう少しとりたかった。最後のまとめを教師がしてしまったので、生徒にさせるべきであった。教師自身がなるほどと思わせられる生徒の意見があった。

・協議

佐々木

参観された先生方から、授業について良かった点、改善点などを話してください。

大門

クラゲチャートがわかりやすかった。電子黒板が活用されていて参考にしたいと思った。

中山

導入のエピソードがよかった。生徒が惹きつけられていた。先生がカードを出しながら進めていてよかった。まとめの言葉は、生徒から引き出せばよかった。

小澤

課題設定からの流れがわかりやすくてよかった。クラゲチャートがよかった。個人の時間とグループの時間が分かれていてよかった。

グループ活動でホワイトボードに書かせるときに、最初から「十七条の憲法」「冠位十二階」「遣隋使」「仏教政策」の4つの項目があると、何をどのように書けばいいのか、私だったら迷ってしまうし、字が小さくなってしまうと思った。例えば、2項目ずつ各班に考えさせ、後から全体で共有して話し合ってもよかったのではと思う。

小林

時間配分が、まとめと振り返りまでいけなくて残念だった。同じ生徒が指名されている気がした。板書の計画がよかった。整理されていてよかった。

吉澤

電子黒板が活用されていてよかった。カードなど、いろいろな準備もお疲れ様でした。生徒に「拍手」といったときに、教師が後ろを向いていたので、生徒の情意面への配慮はどうだったか、考えてほしい。生徒の発言をもっと拾ってはどうか。

本校の中等部の3学年を見据えたときに、中等部の授業としては、もう少し底上げしたい。これまでいた中学校との違いをあれば教えてほしい。

武藤

今回の内容でいうと、聖徳太子の「政策」がわからない生徒が多い。本校では、「政策」という知識は定着しているので、その先を考えさせることができた。他の中学校との違いとしては、前提となる知識があるかないか、が大きな違いだと思う。

金

行動がイメージしやすい。次に何をするのか、わかりやすい。話し合いの過程が見える。グループ活動のときの机の配置が、すぐに前を見られるレイアウトでよかった。

ホワイトボードに4つの項目について書かせるのは多い。小学校の既習事項から導入に入ると、生徒は安心するのではと思った。もう少し生徒の方を向いて話をしてよいと思った。生徒に背を向けている場面が多かった。

佐々木

生徒がよく頑張っていると思った。主体的な学習になっていた。クラゲチャートを使うことで学びが深まっていると思った。

授業は最後のまとめが大事。時間の制約があったが、視点がややぼやけている気がした。

武藤

活動を精選すると、最後までまとめられた気がする。

佐々木

歴史としてのまとめとしては、このようなスタイルでもよかったと思う。

金

各班のホワイトボードを見ていたら、クラゲチャートの1段階目で終わっている班と、2～3段階目までやっている班があった。教師の指示を明確にしておいた方が、生徒はやりやすかったと思う。

武藤

生徒は、クラゲチャートは、ほぼ初めてだった。

小澤

私が生徒ならば、教師の指示では、最初、何をすればいいのかわからなかった。4つの項目を書かせるのは、作業量が多いと思った。すぐに書ける生徒と、ただ黙って見ているだけの生徒がいると思った。

・指導助言

社会科は、段階的に社会がわかるようにしていく教科である。そのための教材研究・教材分析が大事である。指導案にあった、単元構造図がよくできている。単元構造図があると、生徒に何の力を付けさせていきたいかが明確になる。また、授業者の感想で「生徒から学ぶこともあった」という謙虚さがよかった。

協議の視点「(1) 他者の様々な意見に触れ、自分の考えを広げたり、課題について多面的・多角的に考えたりする場が設定されていたかどうか。」についてである。授業では、「学習課題」が大事だと思う。本時は、「厩戸皇子が聖徳太子と呼ばれるようになった功績とは?」だったが、ここに「功績」という言葉を使ってよかったです。生徒は、聖徳太子の政策の4つ「十七条の憲法」「冠位十二階」「遣隋使」「仏教政策」が功績である、ということで本時の目標が達成されたと思ってしまう。学習のねらい、課題を明確にすることがとても大事であり、1時間のゴールをどこに持ってくるのかが重要である。

また、最後のまとめを教師の言葉でてしまったとのことだったが、生徒からいろいろな考えが出ていたが、生徒の考えと、本時の課題とでズレが生じていたのではないか。授業のねらいが2段階になってしまい、かえって難しくなってしまったのではないかと思った。教師は、授業のゴールを決めたら、多様な生徒をイメージして考えていくべきである。

社会科は、資料が勝負。「資料を根拠に、こう言えます。」となる。地図を示していたが、カラーで、もっと大きく、日本との位置関係を説明するべきだった。年表も示されていたが、生徒にあまり活用されていなかった。年表から、生徒に何を引き出させたいかを吟味する必要がある。

ホワイトボードに書かせたことについては、各班のホワイトボードを黒板に提示した後で、生徒に各班への質問がないかと振ってみる、生徒にまとめさせる、等の活用をすればよかったのではないかと思う。また、思考ツールとしてのクラゲチャートを作ること自体が目的にならないように。クラゲチャートを利用して、話し合いの質が高まるように工夫すればよかったと思う。

第2学年 保健体育科学習指導案

実施日 9月21日(水)4校時
授業者 櫻田 文人 (T1)
 鎌田 拓也 (T2)
場 所 中等部棟アリーナ

1 単元名と指導のポイント

「バスケットボール」 (E球技 ア. ゴール型)
—作戦を繰り返し、対話の中で改善を図る—

2 単元の目標

- (1) ボール操作と空間に走り込むなどの動きによってゴール前での攻防をすることができる。
- (2) 攻防などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができる。
- (3) 一人一人の違いに応じたプレイなどを認め合い、仲間の学習を援助することができる。

3 生徒と単元

(1) ゴール型球技は、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、球技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに、基本的なボール操作と仲間と連携した動きで攻防を展開できるようにすることをねらいとしている。その際、攻防などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫する中で、自己や仲間の考えたことを他者に伝え合うことが大切である。また、学習に積極的に取り組み、作戦などについての話し合いに参加することや一人一人の違いに応じたプレイなどを認めることなどに意欲をもち、健康や安全に気を配ることも大切である。さらに、知識の理解を基に運動の技能を身に付けたり、技能を身に付けることで一層知識を深めたりするなど、知識と技能を関連させて学習できる面もある。

グループで互いに関わり合いながら学習することにより、技能などを高め合いながら望ましい連帯感などもつくりあげができる単元である。

(2) 2年3組は男子9名、女子 17 名の合計 26 名の学級である。落ち着きのある授業態度が見られ、課題にも意欲的に取り組んでいる。スポ少などの競技経験者は男子1名と女子の2名のみであり、多くの生徒が小学校における授業でのバスケットボール経験のみとなっている。ボール操作の技能に対する苦手意識をもっている生徒が7割程度いるものの、昨年度のバスケットボール授業については、積極的に取り組んでいた。授業においては「シュートが決まったとき」や「パスがつながったとき」などのような技能面の高まりによる楽しさだけではなく、「チームで協力して活動すること」や「チームで交流すること」などのようなグループ活動の充実にも楽しさを感じている。本単元では各観点のバランスをとりながら学習活動を行い、グループの機能を活かしながら互いのよさを認め合えるような活動が進められるように配慮していくたい。

(3) 本単元では、グループ内での対話を通して課題を明確化し、その解決に向けた合理的な運動の仕方を考え、繰り返し実践と改善を図ることにより、学びが深まると考える。そのためには、話し合い活動をする上で求められる知識や基本的な技能などの定着が効果的に図られるように、全体計画を配列する必要がある。そして、自己や仲間が思考し判断したことを伝え合える雰囲気づくり、自他の思考や判断を出し合い試行錯誤できる場づくり、仲間の学習の援助や自他のプレイを確認できる空間づくりを進めていく。

そのためにも、課題に対して様々な側面から迫ろうとする考え方を育て、できるようになったという喜びを体験できるような段階的な練習なども取り入れたい。さらには、互いの動きを確認し合える場面を保障することで運動のもつ特性を十分に味わい、心身の交流などを通して仲間と共に高め合おうとする学習活動になるようにしたい。

4 全体計画（総時数10時間）

学習活動	評価	時数
<p>○バスケットボールの特性や成り立ち・学習の進め方について知り、活動の見通しをもつ。</p> <p>○第1回スキルテストを行い、自己の能力を把握する。</p> <p>(1) レイアップシュート (2) 30秒間ゴール下シュート</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・バスケットボールの特性や成り立ちを理解している。 ・ゴール前への侵入による攻防について学習を進めていくことに対して見通しをもつことができる。 ・スキルテストを通して、自己の能力を把握している。 <p>知識・技能 (学習シート・観察)</p>	1
<p>○守りを突破し攻撃する練習を行う。 (攻撃2－守備1、攻撃2－守備2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボールを持たないときの動き ・守備者の引きつけとパス 	<ul style="list-style-type: none"> ・二人の連携プレイについて作戦板を用い仲間と共有することができる。 ・I C Tを活用し、実際の動きを確認しながら改善点などを発見し、助言し合っている。 <p>思考・判断・表現 (観察・作戦シート・学習シート)</p>	1
<p>○数的優位な状況をつくり攻撃する練習を行う。 (攻撃3－守備2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボールを持たないときの動き ・守備者の引きつけとパス 		1
<p>○数的優位な状況・数的不利な状況での攻防を工夫しながら練習を行う。 (攻撃4－守備3)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボールを持たないときの動き ・守備者の引きつけとパス ・ボールを持っていないプレイヤー同士の連携 ・連携したプレイで攻撃を防ぐ 	<ul style="list-style-type: none"> ・作戦の成功例や動きの観察結果などについて分析し、チームメイトと共有できるように分かりやすく伝えたりしている。 <p>思考・判断・表現 (観察・作戦シート・学習シート)</p> <p>・数的優位な状況を生かす戦術、数的不利な状況を補う戦術について理解し、活用することができる。</p> <p>知識・技能 (観察・学習シート)</p>	2 本時 4/10
<p>○チームメイトと協力してスペースをつくりだし攻撃する練習を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カッティングプレイやスクリーンプレイの理解と活用 <p>○チームメイトと協力してスペースを埋め攻撃を防ぐ練習を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カバーリングや連携によるスクリーンプレイへの対応 (攻撃3－守備3、攻撃4－守備4) 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手のスキをつくプレイやスクリーンプレイについて理解し、活用することができる。 <p>知識・技能 (観察・学習シート)</p> <p>・I C Tを活用し、実際の動きを確認しながら改善点などを発見し、助言し合っている。</p> <p>思考・判断・表現 (観察・作戦シート・学習シート)</p>	2

<ul style="list-style-type: none"> ○学習のまとめとしてミニゲームを行う。 (攻撃4－守備4) ・ゲームの進め方について知る。 ・分担した役割に応じた活動の仕方を見つける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ルールやマナーなどを守りながらゲームを進め、お互いの頑張りを認め合っている。 <p>学びに向かう力 (観察・学習シート)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ルールやゲームの運営の仕方について理解し、ゲームを進めることができる。 <p>知識・技能 (学習シート・小テスト)</p>	2
<ul style="list-style-type: none"> ○第2回スキルテストを行い、自己の能力を把握する。 <ul style="list-style-type: none"> (1) レイアップシュート (2) 30秒間ゴール下シュート ○学習活動全体を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スキルテストを通して、自己や仲間の能力の高まりを把握している。 <p>知識・技能 (学習シート)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習シートを用いて、学びの成果を共有しようとしている。 <p>学びに向かう力 (学習シート)</p>	1

5 本時の計画 (4/10)

(1) ねらい 数的優位(アウトナンバー)な状況を活用できるような作戦を立て、その動きのよさや改善策について協議し合うことができる。

(2) 展開

段階	生徒の活動	学習形態	教師の支援 期待される生徒の姿	評価(方法)
導入 10分	<p>1 ウォームアップをする。</p> <p>○既習内容の活動を中心に運動する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・レイアップシュート ・ゴール下シュート ・準備体操 <p>2 学習課題を確認する。</p> <p>アウトナンバーの状況を使って、ゴール周辺で攻撃する作戦を考えよう。</p>	<p>個人 全体</p> <p>全体</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ゴール周辺での攻撃を安定して行うことができるよう、パスやドリブル、シュートの練習を取り入れたウォームアップを設定する。 ・グループ毎にまとまり、準備運動や既習内容に沿った運動を行っている。 <p>○既習内容をもとに本時の学習の方向性をつかむことができるよう、めあてを提示する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チームメイトと話し合うなどして、ポイントを押さえながら課題解決の見通しをもっている。 	

展開 32分	<p>3 数的優位な状況での攻防について、グループで考えた作戦や動きを確認する。(男子2グループ、女子3グループ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループミーティング (ホワイトボードを用いる) ・グループ内での展開練習 	グループ	<ul style="list-style-type: none"> ○各グループで使用するスペースが重なり合わないように、作戦に応じたコートの割り振りを考慮し助言する。 ・グループの作戦や動きのポイントを明確にし、その視点をしながら話し合ったり、動きを試したりしている。 ・「ゴール周辺を攻撃するにはどんな動きをすればいいのかな」 ・「守備者を引きつける動きにはどんなものがあるのかな」 ・「どんな場所にチャンスができるやすいかな」 ・プレイヤーや観察者が声を掛け合いながら活動している。 	
まとめ 8分	<p>4 グループ毎に実際の動きを分析する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タブレットを用いて自分たちの攻防を撮影する。 ・実際の動きを確認しながら助言し合い、作戦の成果を振り返る。 	グループ	<ul style="list-style-type: none"> ○ボールを持っていないプレイヤーの動きやパスなどによって守備側がどのように反応したかに注目し協議活動を行える場を設定する。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 作戦の成功例や動きの観察結果などについて分析し、チームメイトと共有できるように分かりやすく伝えたりしている。 (観察・作戦シート等) </div>
まとめ 8分	<p>5 本時の授業を振り返り、次時の見通しをもつ。</p>	全体会員	<ul style="list-style-type: none"> ○動きの工夫の成功例、失敗例について発表する場を設定する。 ・今日の課題についてグループや個人の動きについて振り返り、話し合っている。 ・互いの成果や頑張りを評価している。 	

6 協議の視点

- (1) 学習のねらいや課題の明確化を図り、学び続ける意欲を喚起する単元構成・授業になっていたか。
- (2) グループや自己の課題を客観的に把握するためのICT活用が機能していたか。

研究協議会記録＜保健体育＞

司会 石井 淳
記録 長谷部 博子

1 協議の視点の確認

【協議の視点】

- ①学習のねらいや課題の明確化を図り、学び続ける意欲を喚起する単元構成・授業になっていたか。
- ②グループや自己の課題を客観的に把握するためのICT活用が機能していたか。

2 授業者から

本日はゴール型球技、バスケットボールの授業であった。授業づくりの中で、中高一貫校での高校のバスケットボールの授業が話題になった。女子のゲームの中で「接待バスケットボール」(ボールがゴール付近に運ばれているのにシュートを打たない、オフェンスに対してディフェンスが何もしない)の状況にあった。素早く攻めてディフェンスを置き去りにする、ボールを持っていないプレイヤーがどういった動きをするか、という面白味が味わえていない現状があり、今回のような全体計画を立てた。

オリエンテーションで、リバウンドの確率、攻撃の期待値について事前に生徒に話した。ゴール下でシュートを打った方が得点する可能性が高い、3ポイントラインから打つと成功率が低いが期待値は高い、ただし現状個人的技能が伴っていないところもあるので、まずはゴール型球技の面白さを味わえる動き方を身に付けるということをねらいとした。

本時は4／10、1時間目はオリエンテーションでスキルテストも行った。2時間目では攻撃2守備1の2対1。攻撃2守備2でゲームを行った。2対2の時、どうすれば数的優位になるか、作戦板を用いて考え、試してみた。3時間目は攻撃3守備2でゲームを行った。人数が増えることでボールを持っていない人の動きが大事になってくることを説明した。

本時はウォーミングアップに種目に特化したパラレルなどを取り入れた。本時の課題、アウトナンバーの状況を作りてゴール下でゴールする。中でも空間を作り出す、と言うことを学習課題とした。4対3のゲームに移り、なかなかうまくいかないところが多く、話し合いの時間が十分だったかというところがある。

まとめでは成功例一つだけの紹介に留まった。これもやってみたけれど、うまくいかなかったという失敗の例も紹介できれば良かった。

展開の中で、4人で攻撃するパターンを考えるにはディフェンスがどのように動いていくのかをイメージできていないと難しい。グループ対グループの実践をやってみてうまくいかない、となつてから作戦を立てる方が深まりが出たかも知れない。

評価に関しては観察、作戦シートからも読み取ろうと思っていたが、シートに書きこんでいくところで使いこなせるようになつてない。評価の見取りが課題である。

スペースを作りだそうということについては、片側に寄る、時間差を付けて、というのがグループの中で出ていたので、次の時間につながると考える。

3 協議の視点のもとづく話し合い

〈視点1について〉

- ・全員が楽しそうに意欲をもって授業に参加していて、保健体育への苦手意識を感じなかつた。
- ・今日の気づきで、試合の展開やボールの追い方に対する気付きが明確になっていて、次につながる感じた。
- ・個人やグループへのきめ細やかな助言がなされていた。
- ・話し合いの時間も十分保証されていた。
- ・部活動とは異なるので、どこまで教えるのか教えないのかが難しいが、もう少し教えてもらいたい生徒もいたかも知れない。
- ・女子で他のチームのパスがうまくつながったときに拍手が起こっており、共感的な態度が見えた。
- ・専門用語が多いが、それを知識として定着させていた。
- ・話し合いが多かったが、もっと運動量があつてもよかつたのではないか。
- ・期待値を踏まえ、ゴール下でシュートがされれば、ゴールがきまらなくてもよいということを確認したうえで声かけをしていた。

〈視点2について〉

- ・生徒たちがくり返し映像を見るなどタブレットの有効活用ができていた。運動能力に関係なく作戦板やタブレットを見て意見を出し合えていた。
- ・自分たちの動きを見ながらタブレットを活用できていた。撮影の仕方や位置を考えるとさらにうまく使いこなせたのではないか。
- ・他のチームともコミュニケーションを取り協力しながら、動画の撮影ができていた。
- ・いいプレーをすぐ大きなスクリーンに映して紹介することもできるのではないか。
- ・タブレットを使うことによって気付きがあり、それが話し合いに十分生きていた。
- ・タブレットで何を撮るのかを明確にすること、視点を決めるとなお良かったのではないか。
- ・高く遠い位置で撮影することで、実際に走りやディフェンスの動きが見える、広域が見えるということへの助言が不足していた。
- ・コートでの動きを撮影していたが、作戦板を使っているところも記録できればよかつた。

4 指導助言（久米 美樹 指導主事）

- ・コロナ対策もありいろいろな活動が制限される中でも、2年生の子どもたちが積極的に体を動かし、友達と関わり合いながら考え、動きとして取り入れようとしていた。普段から体育の授業を大事にされていることが子どもたちの姿から見て取ることができた。本時は子どもたちが一生懸命で誰一人「お客様」がいなかつた。シートで確認したことをプレーで表現しよう、拍手があつたり、失敗しても「いいよ、いいよ」、「どんまい！」という前向きな言葉もあり、協働的な学びのベースができていた。先生方の温かく元気な声かけが子どもたちのやる気を上げる要因になっていた。

①授業について

- ・子どもたちがゴールを見据えて授業に取り組むことができていた。単元の見通しをもつことができる内容の学習カードになっていた。

- ・導入で前時までの学習内容をもとに学習内容を提示して、子どもの解決意欲を高め、主体的な学びにつながっていた。
- ・必然性のある話合いを設定できていた。作戦ボードを使って自分たちの動きを可視化しながら確認し、バスケットボール部や経験者が話合いをリードし共有できていた。
- ・話合い活動をする上で、必要となる知識、基本的な技能があった。課題が明確化されていて、何について話し合えばよいかが分かっていて、話合いの求められる知識・技能を習得させた上で行うことが大事である。教えたあとで考えさせることが大事であり、成功体験が学ぶ意欲につながる。
- ・これからは自分たちの課題に気づいて、解決方法を選んだり、工夫しながら対話を深めたり、その中で協力して課題を解決していくプロセスが重要である。
- ・ICT機器の活用について、ただ撮るだけでなくそれについて話し合うことで学びが広がった。
- ・授業の終わりで動きの工夫例を発表したグループがあつたが、みんなでよい動きを共有できていた。作戦の立て方や、ボール操作とボールを持たないときの動きについて知ることが大事である。

②今後の参考にしてもらいたいこと

- ・生徒の実態に応じて運動が得意でない子どもが多いとされるならば、ボールを一人一個持ってドリブル、シュートなどボールに触る時間を設け、試合で必要とされる技術を身に付ける時間を取りてもよかつたのではないか。攻めきる前にボールが取られるというような失敗も少なくなる。
- ・自分たちの攻防の課題が改善されているか、立てた作戦が生かされるかを確認するためにタブレットを活用していたが、ねらいを達成するための活用になっていたか。定点ではなく別の角度から撮ってみるなど、課題が客観的に把握できるような活用の仕方、課題が見やすい状況を作り出すための活用の仕方を検討してほしい。
- ・子どもたちの活動時間、運動量の確保、よりよい学びのためのツールとして活用するためにICTを使う場面、時間を制限して有効に活用していく。
- ・本時の動画を次の時間の導入で活用する、変容を見取るために確認する、よい動きを全体で共有するなど、チームや個人の技能の向上、見方・考え方を働きかせることにつながる。
- ・球技はルールや作戦を工夫して、チーム対チームの攻防によって競争することで楽しさや喜びを味わうことができる運動である。ルールや場を工夫したり、チームの特徴に応じた作戦を立てて、互いに協力して練習を行って技能を身に付けてゲームをすることが学習の中心である。攻撃しやすい状況を作り、チームの特徴に応じた作戦を生かすことが大切である。チーム内で友達と助け合うこと、分担された役割を果たすこと、をこの領域で指導してほしい。
- ・授業づくりの考え方としてすべての子どもが球技の楽しさや喜びに触れて、学習内容を習得することができるようにするために、ルール、活動の場を教師がどう工夫するかがポイントである。

③学習指導要領について

- ・球技に限ったことではないが、2学年に渡る運動の取り上げについて、学習指導要領では中学校1・2年生と、中学校3年生と高校1年生のように2学年に渡る内容が示されている。球技における思考力・判断力・表現力について、1・2年生では2年生の最終段階までに示された内容を身に付けることが大切である。解説に書かれている思考力・判断力・表現力等の指導内容は、「攻防などの自己の課題を見出し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫すると共に、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること」である。2年生で合理的な解決の向けての運動の取り組み方を工夫できるようにするために

は、1年生の段階で運動の取り組み方について学ぶというふうに素地を作ることが大切である。単元に関わらず、2学年のまとまりとして指導計画を考えてほしい。

・球技の魅力を3つ。1つ目は得点を取る喜びがある。ゲームの一員として主役になれる。2つ目は仲間とつながること。必然的に仲間と関わり合って協力しあうことができる。3つ目は勝つ喜び、負ける悔しさを味わえること。勝つこと、負けることを真剣に経験できる運動である。球技は多くの子どもたちが好きな学習である。今後も授業改善によって、体を動かす楽しさを味わわせて、体育が苦手な子どもたちを放置せずに少しでも好きに近づけられるように、体育が得意な子どもたちを育てていってほしい。

地理歴史公民・社会科「歴史総合」学習指導案

日 時 令和5年2月13日（月）7校時
場 所 1年B組教室
対 象 1年B組 39名
教科書 『歴史総合 近代から現代へ』山川出版社
授業者 秋田南高校 教諭 關 友明

1 単元名

第Ⅱ部 國際秩序の変化や大衆化と私たち 「國際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題」

2 単元の目標

- ア 現代的な諸課題の形成に関わる国際秩序の変化や大衆化の歴史を理解することができる。
- イ 事象の背景や原因、結果や影響などに着目して、日本とその他の国や地域の動向を比較したり、相互に関連付けたりするなどして、主題について多面的・多角的に考察し表現することができる。

3 単元観

本単元は、第Ⅱ部のまとめにあたる。第Ⅱ部は、二度の世界大戦の時代における国際関係の緊密化や、大衆の政治的・経済的・社会的地位の変化などを扱ってきた。学習指導要領では、本単元において、これまでの学習をもとに、自由・制限、平等・格差、開発・保全、統合・分化の観点から主題を設定し、国際秩序の変化や大衆化の歴史に存在した課題について、同時代の社会及び人々がそれをどのように受け止め、対処の仕方を講じたのかを諸資料を活用して考察し、現代的な諸課題の形成に関わる国際秩序の変化や大衆化の歴史を理解することをねらいとしている。

本時では、「統合・分化」の観点から、移民・難民をめぐる問題を主題として選択した。20世紀初頭のアメリカにおける移民法制定と、現代ドイツの移民受け入れをめぐる諸問題について、グラフや史料の読み取りを通してその背景や要因を考えさせるとともに、現代のグローバル社会における「統合・分化」の問題について、多面的・多角的に考察させたい。

4 生徒観

中入生のみ39名のクラスである。学習意欲は総じて高く、常に集中して意欲的に授業に取り組んでいる生徒が多い。中学校社会科での既習事項は概ね定着しており、グループでの意見交換などにも活発に取り組んでいるが、知識を活用して自分の考えを表現する場面では、発言が得意な生徒に任せがちな雰囲気もある。他の意見に触れて、自身の考えを広げたり、深めたりすることができるよう、協働的な学習活動の場面を適切に設定し、自信をもって自分の考えを表現できるよう導きたい。

5 単元の学習計画

第5章 第一次世界大戦と大衆社会	9時間
第6章 経済危機と第二次世界大戦	8時間
第7章 戦後の国際秩序と日本の改革	5時間
第Ⅱ部のまとめ	1時間（本時）

6 単元の評価規準

A 知識・技能	B 思考・判断・表現	C 主体的に学習に取り組む態度
諸資料から情報を適切かつ効果的にまとめ、現代的な諸課題に関わる国際秩序の変化や大衆化の歴史を理解している。	近代以降に発生した移民や難民の背景などに着目して、これまでの学習を振り返り、諸資料を活用して、現代的な諸課題との関連を考察し、探究した結果を表現している。	よりよい社会の実現を視野に、自身との関わりをふまえて学習を振り返るとともに、今後の学習へのつながりや課題を見出そうとしている。

7 本時の計画

(1) 本時の目標

20世紀初頭のアメリカ移民法制定と、現代ドイツの移民受け入れをめぐる諸問題について、グラフや史料を適切に読み取り、グローバル社会における「統合・分化」の問題について、多面的・多角的に考察することができる。

(2) 本時の学習計画

過程	生徒の学習活動	形態	教師の支援	評価
導入	本時の学習内容と目標を確認する。 難民・移民受け入れの是非をめぐる問題について考えよう。	全体	ワークシートを配付する。	
展開	① 20世紀アメリカの移民排斥について 1924年移民法を読み、そのねらいを考える。 グラフと資料から移民増加の背景を読み取る。 なぜアメリカ政府は、日本からの移民を排斥したのだろうか。	個人 個人	特に日本人の移民を禁じたことについて指摘する。	A B
	移民排斥の理由として考えられることを考え、他の生徒と共有する。	個人ペア	数名に発言させる。	B
	② 21世紀ドイツの移民受け入れについて 2015年欧州難民危機について、グラフから読み取る。 なぜドイツ政府は、難民・移民の受け入れを決定したのだろうか。	個人	難民発生の要因について示す。	
	背景として、ドイツの固有の歴史があることに気付く。 近年勢力を拡大している右派政党 AfD が受け入れ反対を主張する理由について考える。 難民・移民は受け入れるべきだろうか。	個人	2017年の連邦議会選挙で AfD が議席を伸ばしたこと示す。	
	自分なりの考えを Jamboard に入力し、グループで共有する。	個人グループ	日本の難民・移民政策の現状を示す。	B
まとめ	他のグループの考えを基に、自分の考えを深める。	全体	各グループの Jamboard をスライドに投影し、全体に共有する。	B C

(3) 目指す生徒の姿

これまで学んだ知識をふまえて諸資料を読み取り、他の生徒と学び合いながら日本と世界の事象を比較して、問い合わせに対する自分なりの答えを表現することができる。

地歴公民・社会科 研究授業 実施記録

教諭 關 友 明

1 授業について

学習指導要領改訂に伴って今年度の高校1学年から始まった新課程における新科目「歴史総合」の授業を行った。今年度、本校地歴公民・社会科では本科目の実施にあたり、3名の教員で6クラスを担当した。授業は、共通の教材プリントを軸に進める形として、プリントは3名で協議しながら分担して作成した。

今回の研究授業にて扱った単元「国際秩序の変化や大衆化と私たち」は、第Ⅱ部のまとめにあたり、生徒は設定した主題をもとに、歴史上の課題について諸資料を活用して考察し、現代的な諸課題の形成に関わる歴史を理解することをねらいとして実施した。教材のプリント作成は授業者が担当した。

【研究授業の概要】

- (1) 日 時 令和5年2月13日(月)7校時
- (2) 場 所 1年B組教室
- (3) 対 象 1年B組 39名
- (4) 教科書 『歴史総合 近代から現代へ』山川出版社
- (5) 授業者 教諭 關 友明

2 参加者からのコメント

- ・かつてのアメリカ移民法と比較しながら、現代の移民受け入れについて考察させるというやり方は歴史学習の真骨頂であり醍醐味だと思う。両者の取り扱い方が適切で生徒の意欲・関心を引き出させていた。
- ・生徒の思考を助けたり促したりできる資料やグラフであった。提示の仕方もよかったです。特にドイツの議席数の変化のグラフがよかったです。
- ・ICT機器の活用が、教師側・生徒共に慣れていて、有効なツールとして授業に役立てられていた。
- ・地理では、移民・難民について、人口移動の分野で取り扱うが、人口移動の理由としてPUSH要因とPULL要因の両面で捉えさせている。歴史の授業でここまで踏み込む必要はないかもしれないが、指導する側の意識の中には持つていなければならぬことだと思う。
- ・最後の「難民・移民を受け入れるべきか」という問い合わせについて、ドイツのことなのか、ドイツに関わらずのことなのか、日本ではということなのか、ちょっと混乱したように思う。
- ・難民と移民がごっちゃになっていた感がある。

3 授業者より

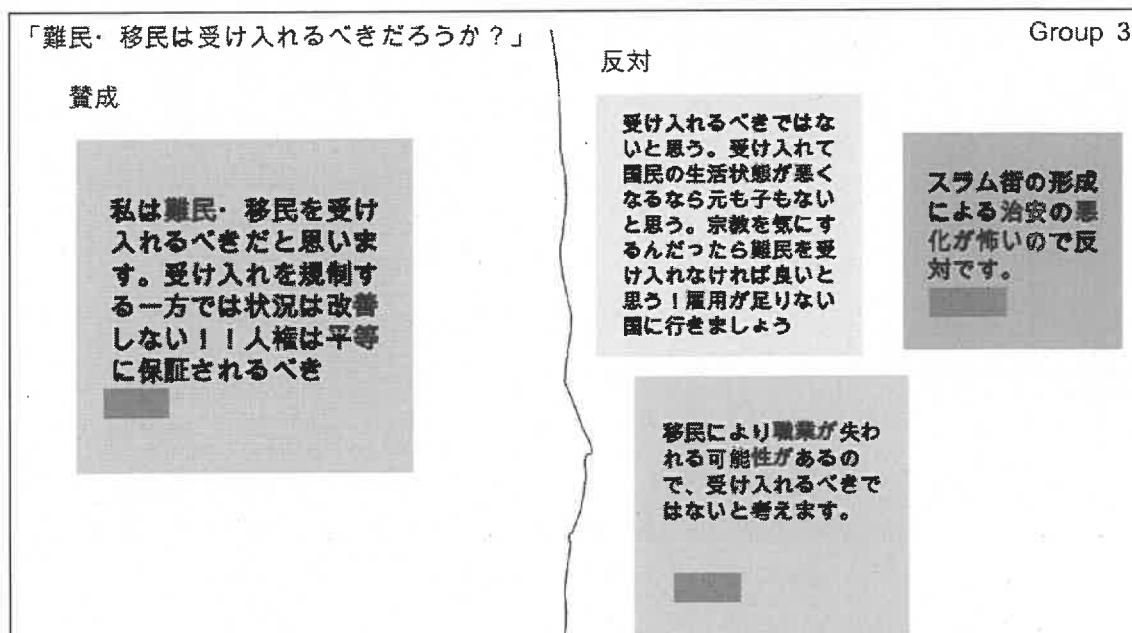
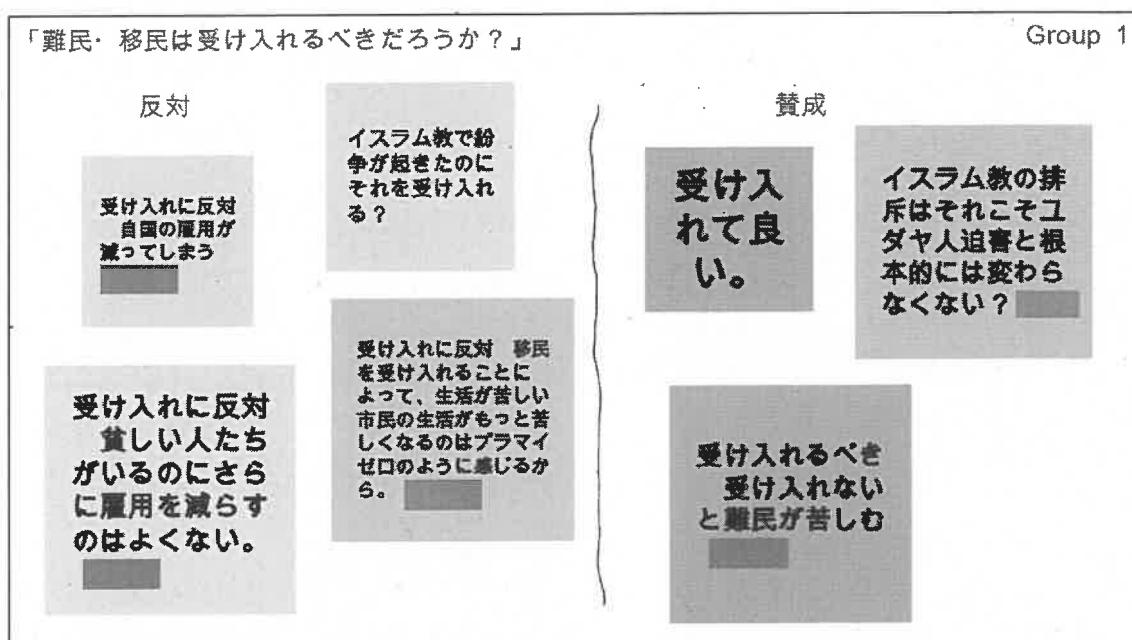
教科書に掲載されていた、20世紀のアメリカの移民法制定と、2015年年の欧州難民危機の資料をベースとして、複数の資料を読み取らせて、多面的に歴史的事象について考え、それを現代的諸課題に活用することをねらいとした。最初の問い合わせ「アメリカ政府が日本からの移民を排斥した理由」については、正解に直接つながる材料は少なかったのだが、生徒は資料を吟味し、自分なりに答えを引き出していた。2つめの「ドイツ政府が難民・移民を受け入れた理由」については、やや誘導的な資料ではあったものの、ナチスの

戦争犯罪について触れるなど、本単元で学んだ知識を活かした発言が出たのは良かった。

授業の後半で、移民受入に反対するドイツの右派政党の主張や、その政党の議席数増大の資料を提示して、生徒の意識を揺さぶり、移民受け入れの是非について考えさせる場面を設定した。その後、グループで話し合い、出た意見を Jamboard 上で共有した。生徒たちの意見は賛否に分かれたが、それぞれに根拠をもった主張ができていたこと、他の意見から考えを深めることができていたことが見て取れた。そこから次の学びにつながるような活動となつたと思う。また、ICTを活用することで、協働的に考えを深める機会をスムーズに設定できたのではないかと考えている。

生徒にとって本授業は、非常に多くの情報を読み取り、整理して考え、そして表現するという忙しい授業であった。すべての生徒がついてくることができていたか、また、資料の内容・提示方法などには改善の余地があると思う。この後も、日本や世界の歴史を資料の活用を通して学び、現代の諸課題について考えるという「歴史総合」のねらいに即した授業を展開できるよう、引き続き授業改善に努めたい。

4 授業で生徒が作成した Jamboard の画像（一部） ※生徒氏名部分は画像を修正



令和4年度 高1 歴史総合

第Ⅱ部まとめ (p.170)

国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題

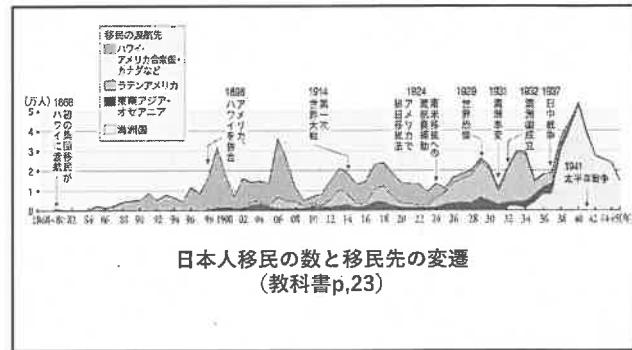
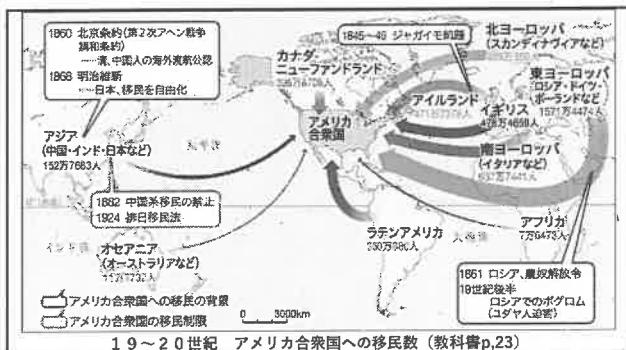
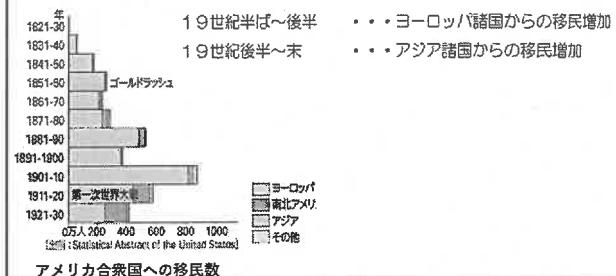
「統合・分化」

学習課題：

移民・難民受け入れの是非について考えよう。

1. 20世紀、アメリカの移民法について

(1) アメリカへの移民の状況



ハワイの砂糖産業は、1835年、西欧人によるカウアイ島での砂糖キビ栽培が始まります。1848年に土地の個人所有が認められ、それまでハワイの人々が生活に必要なだけ植えていた砂糖キビには、西欧人による砂糖プランテーションでの大規模栽培に変化しています。(略)

砂糖産業は多くの労働人口を必要とするため、ハワイ王国は1852年に外国からの移民の受け入れを決定し、(略) 1864年には移民局が発足されました。

1860年に、サンフランシスコからの帰路、威脅丸が石炭と水の補給のためにホノルルに寄港し、その際に、カーネハメハ四世が日本からの移民を要請しました。この時の通訳はジョン万次郎が勤めています。(略) 1868年、150名ほどの移民が横浜からホノルルに到着します。(略) ハワイ王国が終わりを告げるまでに、約29,000人の日本人が移住しました。

ハワイが合衆国に併合された後(略)、1900年からは「自由移民」の時代となり、この間に約7万1千人が移住し、一方でハワイから米本土への再移住の数も増加しました。その後1908年から24年に(略) 更に約6万1千人が来島し、総計で22万人の日本人がハワイに移民として渡ったことになります。1920年には、ハワイの人口の中で日系人の占める割合が全体の42.7%にまでになりました。

ハワイ州観光局 公式ラーニングサイト「アロハプログラム」より

(2) アメリカ政府の動き

1924年移民法(一部要約)

- ① 国別の移民の年間受入れ数は、1890年のアメリカ合衆国の国勢調査時の各國出身者数の2%以下とする。
- ② 帰化不能外国人、すなわちアメリカ合衆国への帰化申請をしない契約労働者の存在は認めない。

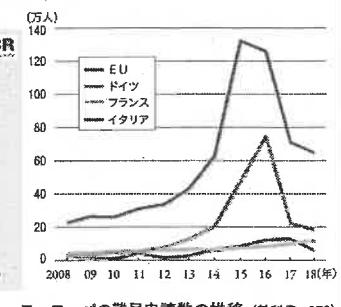
なぜアメリカ政府は、日本からの移民を排斥したのだろうか。



2. 21世紀、ドイツの移民・難民受け入れについて

(1) 2015年欧洲難民危機

難民発生国 | 2014年末



2. 21世紀、ドイツの移民・難民受け入れについて

(1) 2015年欧洲難民危機



(2) ドイツ政府の動き

以下は大規模な難民・移民の受け入れを決めた、ドイツのメルケル首相(当時)の声明である。

メルケル首相の声明

ドイツは助けが必要とされるところはどこであれ助けます。
他者の尊厳に疑問をもつ者への寛容はありません。法的および人的援助をしなければならないところで、助けを惜しむ者への寛容はありません。



(2) ドイツ政府の動き

なぜドイツ政府は、難民・移民の受け入れを決定したのだろうか。

④ ドイツ基本法(憲法に相当)

16条 A 項 政治的な迫害を受けている者には庇護権を与える。

政党「ドイツのための選択肢 (AfD) 」

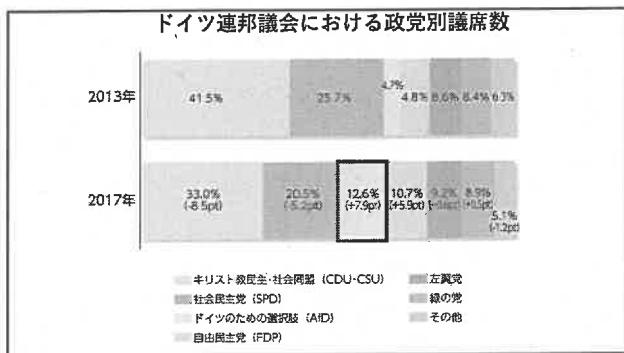


おもな主張

- EU国境の封鎖。入国審査の厳格化。
- ドイツ経済に貢献できる移民だけを受け入れ。
- 外国資金で建設されるイスラム寺院の閉鎖。
- ミナレット(イスラム教寺院の尖塔)の禁止。
- 女性の全身を覆うチャドル、ブルカの禁止。
- 徴兵制の復活。
- EU通貨同盟からの離脱。
- ユーロ圏に残留すべきか国民投票を実施。など



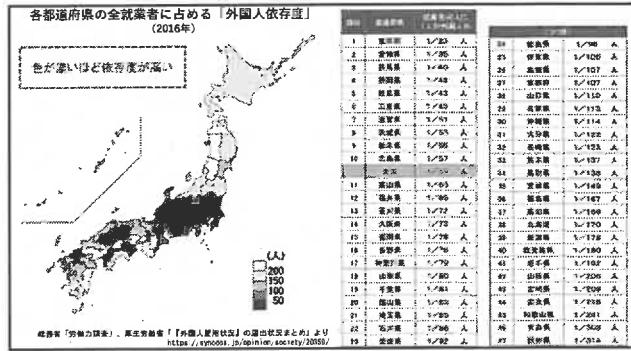
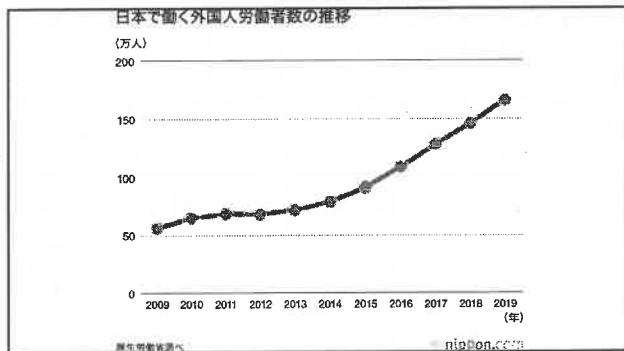
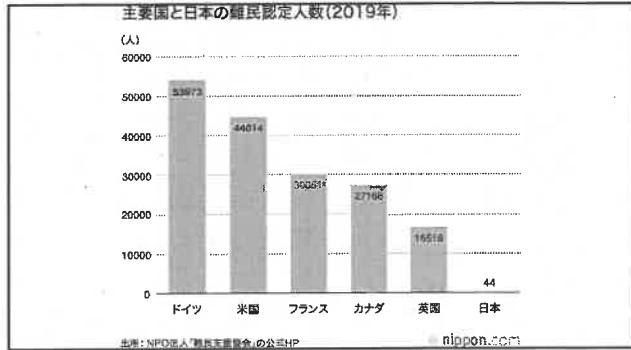
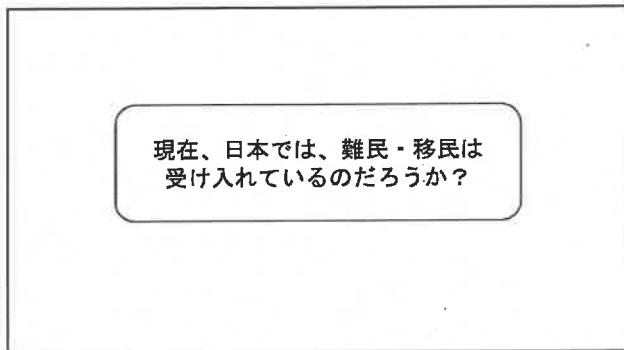
アリス・ワイデル
代表 (2017年当時)



ドイツの東西格差 (教科書p.170)

	旧西ドイツ地域	旧東ドイツ地域
人口	6682万人	1619万人
1人当たり 域内総生産	4万2971ユーロ	3万2108ユーロ
平均賃金	3340ユーロ	2790ユーロ
失業率	4.8%	6.9%

* 数値は2018年。旧東ドイツ地域の人口にはベルリン全体を含む。



第II部まとめ 国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題

学習課題：移民・難民受け入れの是非について考えよう。

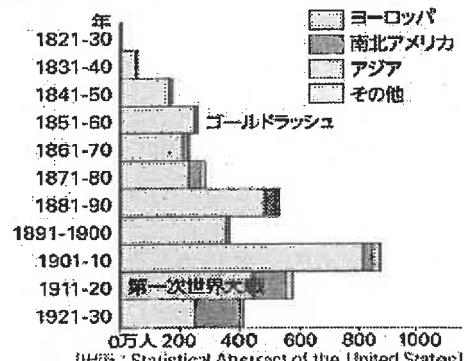
1. 20世紀、アメリカの移民法について

(1) アメリカへの移民の状況

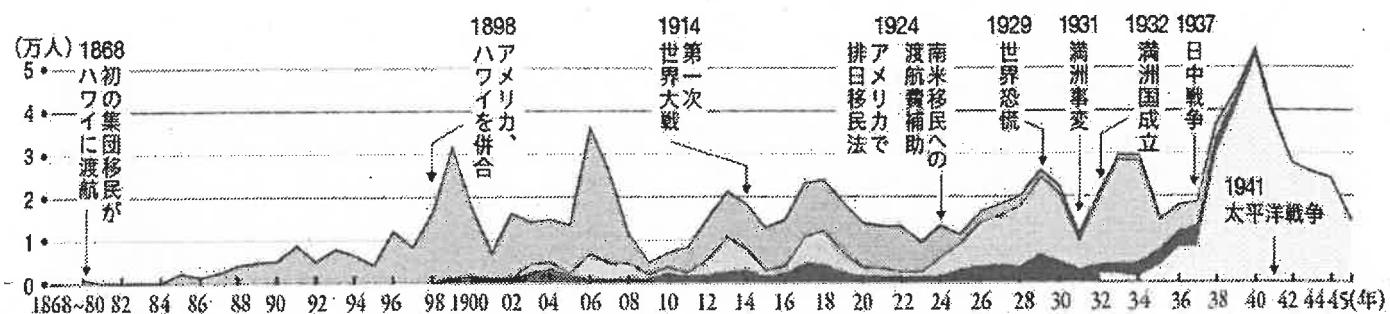
19世紀半ば～後半 ・・・ ヨーロッパ諸国からの移民増加

19世紀後半～末 ・・・ アジア諸国からの移民増加

19世紀末～20世紀初 ・・・ アジアからの移民を規制



資料① アメリカ合衆国への移民数の推移



資料② 日本人移民の数と移民先の変遷（教科書 p.23）

(2) アメリカ政府の動き

なぜアメリカ政府は、日本からの移民を排斥したのだろうか。

2. 21世紀、ドイツの移民・難民受け入れについて

(1) 2015年歐州難民危機

2015年、120万人以上の難民がヨーロッパへ

→ ドイツ政府は、70万人以上の受け入れを決定

(2) ドイツ政府の動き

なぜドイツ政府は、難民・移民の受け入れを決定したのだろうか。

単元	第II部 国際秩序の変化や大衆化と私たち
単元を通して考えること	現代的な諸課題の形成に関わる国際秩序の変化や大衆化の歴史を理解する
小単元	国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題
小単元を通して考えること	近代の諸課題について当時の人々の対応を考えるとともに、現代的な諸課題について、多面的・多角的に考察する

3. 難民・移民は、受け入れるべきだろうか。

自分の考え方	まとめ
--------	-----

資料③ ハワイへの日本人の移民について

ハワイの砂糖産業は、1835年、西欧人によるカウアイ島での砂糖キビ栽培に始まります。1848年に土地の個人所有が認められ、それまでハワイの人々が生活に必要なだけ植えていた砂糖キビは、西欧人による砂糖プランテーションでの大規模栽培に変化していきます。(略)

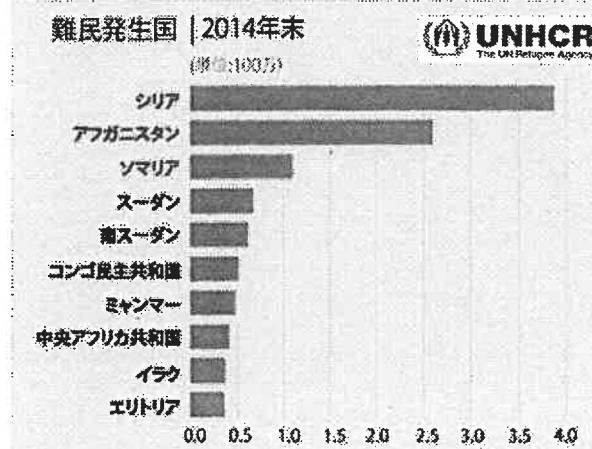
砂糖産業は多くの労働人口を必要とするため、ハワイ王国は1852年に外国からの移民の受入れを決定し、(略) 1864年には移民局が発足されました。

1860年に、サンフランシスコからの帰路、咸臨丸が石炭と水の補給のためにホノルルに寄港し、その際、カメハメハ四世が日本からの移民を要請しました。この時の通訳はジョン万次郎が勤めています。(略) 1868年、150名ほどの移民が横浜からホノルルに到着します。(略) ハワイ王国が終わりを告げるまでに、約29,000人の日本人が移住しました。

ハワイが合衆国に併合された後(略)、1900年からは「自由移民」の時代となり、この間に約7万1千人が移住し、一方でハワイから米本土への再移住の数も増加しました。その後1908年から24年に(略) 更に約6万1千人が来島し、総計で22万人の日本人がハワイに移民として渡ったことになります。1920年には、ハワイの人口の中で日系人の占める割合が全体の42.7%になりました。

ハワイ州観光局 公式ラーニングサイト「アロハプログラム」より

資料④ ヨーロッパに流入した難民の出身国



高等学校数学科 数学Ⅰ 学習指導案

日 時 2022年9月29日(木)

3校時

クラス 1年BD組(選択6教室)

授業者 虹川玲子

1 単元名 第4章 図形と計量

2 単元の目標

- (1) 直角三角形の辺の長さの比と角の大きさの関係として、鋭角の正弦、余弦、正接を定義することを理解する。そして、正弦、余弦、正接の間の関係を調べるとともに、具体的な角に対して、正弦、余弦、正接を計算することができる。
- (2) 鋭角で定義した三角比を拡張し、 0° から 180° までの角の三角比を定義することを理解する。そして、三角比が正負の値をとり得ることを理解させるとともに、鈍角の三角比は鋭角の三角比で表されることを理解する。
- (3) ある角の三角比を与えたとき、その角の大きさを求めることができる。
- (4) 三角形の決定条件を定式化したものとして、正弦定理、余弦定理が導かれるなどを理解する。逆に、これらの定理を用いて、三角形が決定できることを理解する。
- (5) 三角比を用いて三角形の面積が求められることを理解し、円に内接する四角形の面積を求めるのに応用することができる。
- (6) 空間図形について、辺の長さや体積などの量を三角比を用いて求めることができます。

3 生徒と単元

1) 生徒の実態

1BD組を3解体した基礎クラス2組のうちの1クラスで計29名である。学習に意欲的な生徒が多く、話し合いを積極的に行い、他者と協働して解決に向かうことができる。しかしながら、数学に対して自信がなく、苦手意識を持っている生徒が多い。

2) 本単元について

図形と計量は、数学的活動を通して、事象を数理的に扱うのに有用である。図形の構成要素間の関係を三角比を用いて表現するとともに、事象を数学的に捉え、問題を解決したり、解決の過程を振り返って事象の数学的な特徴や他の事象との関係を考察したりすることで、思考力、判断力、表現力を伸ばしていきたい。

3) 本単元の指導について

鋭角の三角比の意味と相互関係を理解し、三角比を鈍角まで拡張して基本事項を身につけた後、正弦定理や余弦定理を用いて、三角形の辺の長さや角の大きさなどを求められるようにする。それらを応用した問題を自分の力で解決しようとする姿勢や思考力を身につけさせたい。そのためには、教科書の問題を中心に授業をし、一通り学習した後、問題集や大学入試問題などにチャレンジし、基礎から発展へとつながるよう指導している。「わかる・できる」の実感と経験から、数学的思考力、判断力、表現力を伸ばしていきたい。

4 全体計画

第4章 図形と計量 (26時間)

第1節 鋭角の三角比 (4)

第2節 三角比の拡張 (4)

第3節 正弦定理と余弦定理 (4)

第4節 図形の計量 (4)

章末問題 (2)

問題演習 (8) 本時8/8

5 評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に取り組む態度
直角三角形を用いて考えられる図形の計量の問題を、三角比を用いて表し、解決することができる。	平面図形や空間図形の計量の考察に三角比を用いることができる。	三角比を平面図形や空間図形の計量に活用しようとする。

6 本時の計画

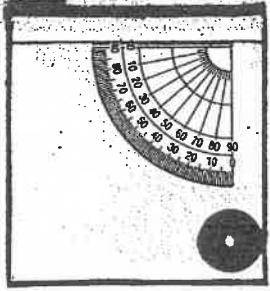
(1) 本時の目標

三角比の考え方を活用して、日常の問題解決への有用性について考える。【主体的に取り組む態度】

三角比の表を利用して、測量計算をする。【知識・技能】

既習事項である定理や公式を活用し、入試問題に取り組む。【思考力・判断力・表現力】

(2) 学習過程

過程	生徒の学習活動	学習形態	教師の支援	評価基準
導入 (5分)	中庭に集合し、各グループに分かれる。前時の学習内容である測量方法について確認する。	グループ	プリントを配布する。 各グループでメジャーを持ってきたか確認する。 角度を測る道具を配布する。 	【主体的に取り組む態度】
展開1 (20分)	プリント問題1(別紙) 校舎の高さを測量するための計測を中庭で行う。 教室に戻り、計算を行う。 タブレットを使用し、ジャムボードで測量結果を確認し合う。 代表のグループが測量方法と結果を発表する。	グループ	作業が順調に進んでいるか確認する。必要があれば補助する。 教室に戻り、机間巡視し、計算方法を確認する。 測量の過程と結果を確認する。実際の高さを確認する。	【主体的に取り組む態度】 【知識・技能】 【思考力・判断力・表現力】
展開2 (15分)	プリント問題2(別紙) 問題を解く(5分) グループで解き方を確認する(5分) 代表のグループが発表する。(5分)	個 グループ	机間巡視し、知識・技能を活かして思考できているか確認する。生徒の解答を書画カメラで黒板に投影する。 相手に伝わる記述・表現力になっているか確認する。	【主体的に取り組む態度】 【知識・技能】 【思考力・判断力・表現力】
まとめ (10分)	プリント問題3(別紙) 昨年の共通テストの問題を確認する。 宿題として取り組む。 時間があれば授業内で解く。	個	時間があれば授業内で解くよう指示する。問題内容を確認し、宿題とする。秋休み明けの授業で提出するよう伝える。	【主体的に取り組む態度】 【知識・技能】 【思考力・判断力・表現力】

数学 I 第4章 図形と計量 プリント (0929)

1 校舎の高さを測量しよう。

(1)中庭で測量したときの図を簡単に描こう。

(2)自分で描いた(1)の図をもとに、三角比の表を用いて校舎の高さが何mになるか、小数第3位を四捨五入して、小数第2位まで求めよ。

(3)グループの仲間の測量結果を確認し合おう。

氏名	測量結果 (m)
(自分)	
実際の校舎の高さ	

2 以下の文章を読み、問題に答えよ。

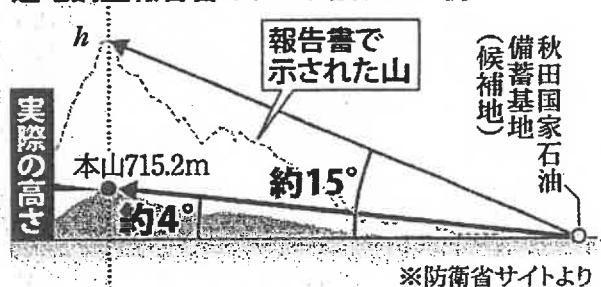
防衛省は、陸上配備型迎撃ミサイルシステム「イージス・アショア」の配備候補地について、平成30年に秋田市の陸上自衛隊新屋演習場を東日本では「唯一の適地」として選定したが、令和2年に配備の断念を公表した。このとき、防衛省の調査報告書のデータに複数の誤りがあったことが明らかになっている。

配備候補地の一つであった秋田県男鹿市の「秋田国家石油備蓄基地」は、男鹿半島にある本山山頂への仰角が適地調査報告書で約15度となっていたが、データには誤りがあった。男鹿市にはそのような高い山は存在せず、実際は約4度だったという。

問題

男鹿市にある本山の標高は715.2mである。この報告書で示された山の標高 h を小数第2位を四捨五入して、小数第1位まで求めよ。ただし、三角比の表を用いてよい。
計算は、タブレットの電卓機能を使用してよい。

適地調査報告書のデータ誤りの一例



$$h = \quad (\text{m})$$

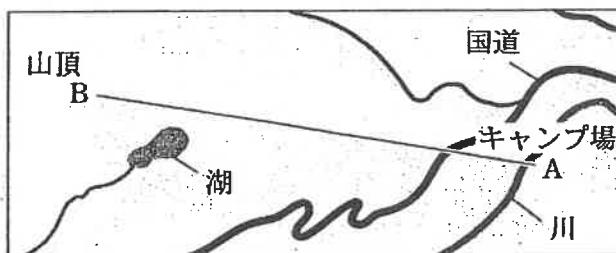
入試問題にチャレンジしよう

3

数学I・数学A

(2) 以下の問題を解答するにあたっては、必要に応じて41ページの三角比の表を用いててもよい。

太郎さんと花子さんは、キャンプ場のガイドブックにある地図を見ながら、後のように話している。



参考図

太郎：キャンプ場の地点Aから山頂Bを見上げる角度はどれくらいかな。

花子：地図アプリを使って、地点Aと山頂Bを含む断面図を調べたら、図1のようになったよ。点Cは、山頂Bから地点Aを通る水平面に下ろした垂線とその水平面との交点のことだよ。

太郎：図1の角度 θ は、AC, BCの長さを定規で測って、三角比の表を用いて調べたら 16° だったよ。

花子：本当に 16° なの？ 図1の鉛直方向の縮尺と水平方向の縮尺は等しいのかな？

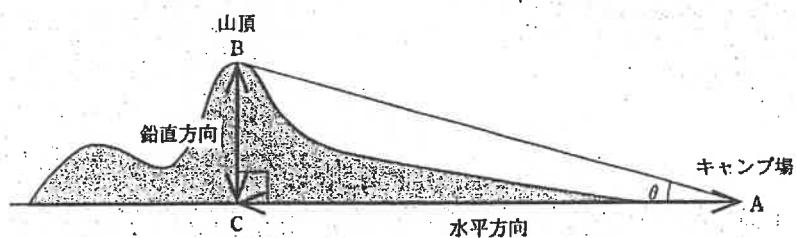


図 1

(数学I・数学A第1問は次ページに続く。)

数学Ⅰ・数学A

図1の θ はちょうど 16° であったとする。しかし、図1の縮尺は、水平方向が $\frac{1}{100000}$ であるのに対して、鉛直方向は $\frac{1}{25000}$ であった。

実際にキャンプ場の地点Aから山頂Bを見上げる角である $\angle BAC$ を考えると、 $\tan \angle BAC$ は [コ] . [サシス] となる。したがって、 $\angle BAC$ の大きさは [セ] 。ただし、目の高さは無視して考えるものとする。

[セ] の解答群

- ⑩ 3° より大きく 4° より小さい
- ① ちょうど 4° である
- ② 4° より大きく 5° より小さい
- ③ ちょうど 16° である
- ④ 48° より大きく 49° より小さい
- ⑤ ちょうど 49° である
- ⑥ 49° より大きく 50° より小さい
- ⑦ 63° より大きく 64° より小さい
- ⑧ ちょうど 64° である
- ⑨ 64° より大きく 65° より小さい

校内授業研究協議会記録（数学）

教諭 虹川玲子

1 はじめに

授業者の反省・感想（授業者：虹川）

生徒に「測量」を体験させたいと考え、研究授業を実施した。特に、①実際に校舎の高さを協働して測量する、②R4年度の共通テストに出題された「イージスアショア問題」の改題を考察する、以上2点の活動を通して測量の有用性を認識することがねらいであった。

①に関しては、測量の指示が曖昧であったため、思ったより時間がかかってしまった。また、「タンジェント（正接）」による解法を想定していたが、「正弦定理」等の解法がでてきたので、時間をかけて多くの生徒の解法を拾うべきであった。

②に関しては、限られた時間で行ったため、駆け足での説明のみになってしまった。日頃から疑問点をもって物事に接していくことの大切さも伝えたかった。

生徒は一生懸命考えてくれたのでよかった。

2 参観者の意見（具体的手立ての観点から）

竹村：想像もつかない解法が生徒から出てきて驚いた。日々の授業で生徒が育っていることを実感した。そのような思考力があるのであれば、直下からの距離が測定できない、やや応用力が求められるケースを扱ってみてもよかつたのではないか。生徒は生き生きと活動していたのが印象的だった。

齊藤：測量の授業をしたことが無かったので、大変参考になった。また、タブレットの活用（特にジャムボード）法がとても興味深く、生徒と教師、生徒と生徒のやりとりがリアルタイムで見られる点がよかったです。環境が整えば、中等部の授業でジャムボードを取り入れてみたい。

工藤：評価に関する質問が1点。本時の授業で「何ができたらBなのか」がわからなかつたので教えて欲しい。指導案では「本時の目標」が3つあって、どこが評価のポイントなのかわからなかつた。もちろん、授業者の先生は「何ができたらBで、ここまでできたらA」という基準をもつた上で授業をされていると思うが、私にはわからなかつた。教えて欲しい。

虹川：「主体的に取り組む態度」は全員Aだと思っている。「知識・理解」「思考力・判断力・表現力」に関しては、測量の過程の計算ができればBと判断していいと思う。

工藤：グループの活動は「楽しくやっていて、活動あって学びなし」になる場合が多い。目標がありすぎるとピントがずれる。中入生であることもふまえてBの判断基準を明確にしないといけないのではないか。

堀内：生徒が測量の活動を通して数学の有用性を実感できていたのがよかったです。「測量計算ができる」が目標なのであれば、入試問題にいかなくともよかったですのではないか。例えば、「鳥海山や城南中学校の高さを測るにはどうしたらよいのか」という応用問題を提示して、ジャムボードをつかって話し合いを深めても面白かったのではないか。生徒の活動が多い授業でよかったです。

大友：3年間育ててきた生徒達で、自分が育てきれなかった部分の「数学の有用性を実感する」ところを取り上げていただき感謝している。グループ活動では「できる生徒」が活躍し、その他の生徒はなんとなくいるだけというケースが目立つ場合が多いが、今回は一人一人にしっかりと計算させていたのがよかったです。また、実際の「測量」の授業を進学校で見られたことに感謝している。

石垣：今回の題材の興味深い点は「対象物の側面が曲面であること」で、接平面に垂直な距離を測定しないと誤差が大きくなってしまうことに生徒が気づくかどうか、ずっと観察していたが、誰も気づかなかった。いつか題材として取り上げても面白いのではないか。またジャムボードを利用した授業を始めて見たが、とても参考になった。

3 最後に（授業者から）

生徒全員が楽しそうに授業に取り組んでいたのでよかったです。進学校でこそ、「測量」の体験を通して様々な解析法やそれらの有用性を実感させることは大事なことで、これからも時間を作り組んでいきたい。



高等学校理科 生物基礎 学習指導案

日 時 令和5年2月1日(水) 2校時
クラス(場所) 1年F組 39名(教室)
授業者 大久保 龍太
教科書 高等学校生物基礎(数研出版)

1 単元名 第4章 生物の多様性と生態系 第2節 植生の分布とバイオーム

2 単元の目標

- (1) 植生の遷移に関する資料に基づいて、遷移の要因を見いだすことができる。 思考・判断・表現
- (2) 植生の遷移をバイオームと関連付けて理解する。 主体的に学習に取り組む態度
- (3) 生態系と生物の多様性に関する観察、考察などを行い、生態系における生物の多様性を見いだすことができる。 知識・技能
- (4) 生物の種多様性と生物間の関係性とを関連付けて理解する。 知識・技能
- (5) 生態系のバランスに関する資料に基づいて、生態系のバランスと人為的攢乱を関連付けて理解する。 思考・判断・表現
- (6) 生態系の保全に関わる諸問題について考え、解決するための方策の話しあいなどを通して生態系の保全の重要性を認識する。 思考・判断・表現

3 生徒と単元

(1) 《生徒の実態》

グループワークでは生徒同士の学び合い・深め合いが自然に見られ、協働による学習が円滑にできるようになってきた。授業時のタブレットの活用にも慣れてきており、GoogleClassroom を用いた課題提出もスムーズになっている。ICT をさらに活用し授業時の課題解決につなげたい。

(2) 《本単元(教材)について》

中学校理科では植生や遷移を扱った学習項目はなく、植生や遷移は地域によつても大きく変化する。教科書では中部日本を中心とした記載となっているが、温かさの指數の紹介とともに秋田県のバイオーム(植生)について垂直分布も含めて考察したい。

(3) 《本単元の指導について》

世界のバイオームと日本のバイオームは教師主導で生徒へ紹介したい。植生の分布に基づいてバイオームが決定されるが、植生の決定要因(年降水量と年平均気温)については水平分布と垂直分布も交えながら、協働による学習を通じて実感させたい。

4 全体計画 (総時数13時間)

学習内容	学習のねらい	配当時間	備考 (実験や指導上の留意点)
第4章 生物の多様性と生態系 1. 植生と遷移 · 植生 · 植生の遷移	· 植生の成り立ちや相観について理解する。 · 植生が時間の経過とともに移り変わっていくことを理解する。	3	· 植生調査の結果についてまとめる。 · 遷移の進行と植物種について考察する。
2. 植生の分布とバイオーム · バイオームの成立 · 世界のバイオーム · 日本のバイオーム	· 世界各地には、多様なバイオームが成立していることを理解する。 · 気候条件によっては、遷移の結果として森林のほかに草原や荒原にもなることを理解する。	本時 3/4	· 暖かさの指數を用いてバイオームを判断する。

3. 生態系と生物の多様性 生態系の成りたち 生態系と種多様性 生物どうしのつながり	・生態系の成りたちを理解する。 ・生物どうしの関係が種多様性の維持にかかわっていることを理解する。	3	・土壤中の生物の調査を通じて種多様性について考える。
4. 生態系のバランスと保全 生態系のバランス 人間の活動と生態系 生態系の保全	・生態系がもつ復元力について理解する。 ・人間活動が生態系に及ぼす影響、生態系の保全の重要性について理解する。	3	・河川における自然浄化の有無を調査する方法を検討する。 ・生体内に蓄積される有害物質の変化について調べる。

5 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
生物の多様性と生態系に関して、知識の習得や知識の概念的な理解、実験操作の基本的な技術の習得ができている。	習得した「知識・技能」を活用して課題を解決できる思考力・判断力・表現力などを身につけている。	知識・技能の習得や思考力・判断力・表現力などを身につける過程において、粘り強く学習に取り組み、自ら学習を調整しようとしている。

6 本時の計画

(1) 本時の目標

暖かさの指数を用いて、各地のバイオームを分析し説明できる。

思考・判断・表現

(2) 学習過程

過程	生徒の学習活動	学習形態	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
導入 10分	1 バイオームについて植生を中心振り返る。	個	・植生を中心にバイオームについて取り上げることを確認する。	思考・判断・表現
	2 本時の目標と学習の流れについて確認する。		・グループワークに移行していくことを伝える。	
展開 30分	3 課題を確認する。	個	・スクリーンへ提示する。	思考・判断・表現
	次の表から、どのようなバイオームが予想されますか。			
まとめ 10分	4 バイオームについて予想する。	グループ ・個	・降水量が十分な日本では気温によりバイオームが決定することに触れる。 ・計算方法の例を示す。 ・班員の役割について確認する。 ・机間指導を通じてデータの読み方を確認する。	・県内のバイオーム〔植生〕について判断できる。 (発表およびGoogleclassroom の提出)
	4 暖かさの指数(WI)について説明を聞く。 5 各地域の温かさの指数を求め、バイオームについて考察する。 6 グループ間で結果を共有する。		・作業を通じた生徒の気づきを大切に授業展開する。	
	7 温かさの指数を用いたバイオームの判断について、水平分布、垂直分布、環境の変化などを交えてまとめる。	個	・環境(平均気温)の経年変化にも注目させ、考察をまとめるよう指示する。 ・提出ボタンの押し忘れないよう指示する。	・本時について気づいたことも含め、まとめている。 (Googleclassroomへの提出) 主体的に学習に取り組む態度

授業資料

GoogleClassroom で配信したデータの一例

A-1												日照時間(h)	雪						
月	降水量			気温				湿度		風向・風速			降雪の深さ(cm)	最高積雪(cm)					
	合計 (mm)	日最大 (mm)	最大		平均		最高 (°C)	最低 (°C)	平均 (%)	最小 (%)	平均 風速 (m/s)	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)						
			1時間 (mm)	10分間 (mm)	日平均 (°C)	日最高 (°C)	日最低 (°C)					風速 (m/s)	風向	風速 (m/s)	風向				
1	76	17	5	///	-45	-12	-87	33	-19.2	///	///	2	7	西南西	///	128.9	189	25	57
2	69	18	3	///	-24	1.1	-61	67	-17.3	///	///	2	9	西南西	///	131.4	141	34	71
3	95	29	5	///	0.4	5	-42	14.6	-12	///	///	2.5	11	西南西	///	213.1	72	13	60
4	69	17	4	///	7.3	13.3	15	23.4	-42	///	///	2.5	10	南西	///	200.4	///	///	0
5	91	16	7	///	11.4	16.5	6.2	26.7	15	///	///	2.7	10	西南西	///	195.1	///	///	///
6	233	70	16	///	16.3	21.1	12	28.4	7.2	///	///	1.8	7	東北東	///	165.8	///	///	///
7	263	50	35	///	22.7	25.8	18.8	34.0	13.3	///	///	1.8	8	西南西	///	202.7	///	///	///
8	263	53	16	///	21.6	26.5	17.5	32.3	13.0	///	///	1.5	9	///	///	178.8	///	///	///
9	105	43	11	///	15.5	21.4	10.4	25.4	4.9	///	///	1.8	8	西南西	///	185.1	///	///	///
10	145	36	4	///	10.1	16.3	4.5	21.2	-1.1	///	///	1.8	9	西南西	///	172.1	///	///	///
11	110	13	7	///	2.4	5.8	-0.9	14.6	-7.2	///	///	2	11	南西	///	86	7	3	4
12	164	23	6	///	-0.2	2.7	-3	6.9	-7.2	///	///	1.9	8	西南西	///	55.2	133	26	36
13																			
14																			
15																			
16																			
17																			
18																			
19																			
20																			
21																			
22																			
23																			

ドキュメントで生徒へ配信した提出課題

生物基礎授業プリント

本時の目標：

暖かさの指数を用いて、各地のバイオームを分析し説明しよう。

クラス：

番号：

名前：

グループで分析したバイオームの記号（A～I）：

担当したバイオームの番号（1～4）：

担当したバイオームの予想（針葉樹林～亜熱帯多雨林）：

算出した暖かさの指数：

暖かさの指数に基づくバイオーム（針葉樹林～亜熱帯多雨林）：

結果の分析：

校内授業研究協議会記録 理科（生物）

教諭 大久保 龍太

1 はじめに （授業者の反省・感想）

授業準備に関して、バイオームを予想させる授業であったが、秋田県の地図や標高もデータとして準備しておけば水平分布と垂直分布について生徒が分析しやすくなると思った。また、気象データは4人のグループワークにあわせて1981年、2001年、2021年、2022年を用意したが、吉良竜夫先生が暖かさの指数を提唱した1949年頃のデータも用意していれば秋田県が暖かさの指数で、夏緑樹林に属す地域であることを伝えやすかったと思った。データの予備を用意しておかなかったことから、グループ編成で少々時間をとってしまい、導入部分全体が長くなってしまった点も課題であった。

授業展開に関して、生徒が教員の説明を聞く場面、生徒どうしで話し合う場面、それぞれ切り替えがしっかりとできていたと思う。生徒全員にそれぞれ異なるデータを与え、分析してもらったことから暖かさの指数を正確に求めているか心配ではあったが、提出させたデータを確認してみたところ、全員、暖かさの指数を的確に算出しており、求め方がわからなかった生徒に対するグループワークや指數算出のWEBページを紹介したことなどが有効に働いていたことを改めて実感することができた。生徒一人一人に黒板に結果を書いてもらつたが、地点A～Iが秋田県のどの地域かまで、地域名も提示できれば考察もしやすかったのではないかと反省している。

授業のまとめでは、生徒のまとめの時間と生徒発表の時間をもう少し確保できればよかつた。提出データでは環境の変化に加え、水平分布や垂直分布までまとめている生徒が多数見られたが、発表では遠慮してしまう傾向があった。生徒がまとめたデータを教員側で読み上げるなど、生徒個々に自信を持たせる教員側の工夫も必要であると思った。

2 参観者の意見

○成果

- ・話を聞く、作業するなど生徒はメリハリをつけて授業に臨んでいた。
- ・日常的にタブレットを用いた授業をしているため、生徒はタブレットをしっかり準備していた。
- ・ICTの活用が適切であった（課題の提示、課題の提出等）。
- ・ハイパーアリンクの設定で生徒が自発的に取り組むような仕掛けがあった。
- ・データの準備が入念で効果的であった。
- ・授業のはじめの方で、提出課題を確認できたことで、見通しを持って学習できたようだ。
- ・1人あたり、1クラスあたりのデータ量がちょうど良く、全員が責任をもって動くことができた。
- ・はじめにバイオームを予想させているのが良い。
- ・秋田（地域）の環境や環境の変化と世界の環境との繋がりが感じられる授業構成が面白かった。
- ・バイオームを空間と時間(X, Y, Z, T)の4次元で考察させる内容がよかつた。
(X-Y:沿岸と内陸, XY-Z:高所と低所, XYZ-T:過去と未来…など)データを多面的に捉える力につながると思った。
- ・本時の目標「…を用いて、…分析し説明できる」は達成されていたと思う。

△課題

- ・導入での植物を挙げるところで、代表的な植物の写真があるとイメージしやすかったのではないか。
- ・バイオームについての「予想」を生徒にいくつか聞いてみても良かったのではないか。
- ・各データが秋田のどこなのかを予想させる際に、地名の一覧を提示すると良かったのではないか。また、秋田県の地図があると確認しやすかったのではないか。(とはいって、タブレットを使って自分で調べるのもICT活用なので、これはこれで良かったかもしれません……)

<その他>

- ・物理の授業で「資料の分析」をするとすれば、どの分野でどのように実施するのかを考えさせられた。
- ・昨年、今年の共通テストの問題をみると、実験や仮説の検証に加えて、実験データの読み取りなどの「分析」に関わる出題もあり、今後の授業における探究活動を実施することの重要性を感じた。仮に実験を実施しなくとも、実験データの読み取りやデータ処理(グラフ作成など)だけでも可能であるので、今後の授業の参考にしたい。

3 まとめ

今年度の理科の具体的目標では、生徒が自ら学ぶ意欲や探究力を高めること、思考・判断・表現力を育成すること、授業・実験・観察等において組織的にICTを活用し授業改善に取り組むことなどを設定していた。

ICTの積極的な活用もあり、生徒が自主的に学習する姿勢や探究しようとする姿勢は養われているように感じている。今回の研究授業における生徒の提出レポートを見ても、授業後半の短い時間で、バイオームの水平分布と垂直分布の分析に加え、気候変動(エルニーニョ現象とラニーニャ現象)も含めた考察まで確認することができた。授業者の想定をこえる分析があった点は最大の成果であった。今後とも、適切なICTの活用により、探究活動の奥深さや面白さを大切にしつつ、生徒の深い学びにつながる授業を展開していきたい。

保健体育科「体育」学習指導案

日 時：2月7日（火）1校時
場 所：剣道場
対 象：1年CD組男子
授業者：金森康臣

【グローバルリーダーとして育成したい三つの資質】

- ① 基本的知識・技能・習慣：探究・協働に必要な（かつその過程で養われる）力
- ② 探究力 : 主体的に課題を発見・探究・解決する力
- ③ 協働力 : 対話を通して良好な人間関係を構築し、仲間とともに探究・創造する力

1 単元名 武道「剣道」

- 2 単元の目標 (1) 技を高め勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、伝統的な考え方、技の名称や見取り稽古の仕方、体力の高め方などを理解するとともに、基本動作や基本となる技を用いて攻防を展開すること。
・剣道では、相手の動きの変化に応じた基本動作や基本となる技を用いて、相手の構えを崩し、
しきたり応じたりするなどの攻防をすること (知識及び技能)
- (2) 攻防などの自己や仲間の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己の考えたことを他者に伝えること。 (思考力、判断力、表現力等)
- (3) 武道に自主的に取り組むとともに、相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にしようとすること、自己の責任を果たそうとすること、一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとすることなどや、健康・安全を確保すること。 (学びに向かう力、人間性等)

3 単元と生徒

(1) 単元観

武道は、武技、武術などから発生した我が国固有の文化であり、相手の動きに応じて、基本動作や基本となる技を身に付け、相手を攻撃したり相手の技を防御したりすることによって、勝敗を競い合い互いに高め合う楽しさや喜びを味わうことのできる単元である。

(2) 生徒観

剣道に興味関心があり、積極的に授業に参加している。D組の生徒は中等部の頃から剣道の授業を受けているので、C組の生徒にアドバイスをする場面もある。協調性が高く、ペアやグループでの活動は、お互いを認め合いながら活動することができる。

(3) 指導観

剣道において防具を着けての試合および地稽古をすることで、技を高め勝敗を競う楽しさや喜びを味わうことができる。そのために踏み込みという技術を理解し、実施できなければならない。前回に空間打突を通して、やり方を教えていて、形はできるようになっている。本時では踏み込み時の体のつかい方や踏み込み時の竹刀操作のポイントを理解して、竹刀とタイヤを使い、実際に物体を打つことで、技術の完成度を確認していくたい。また、打つことが加わるので、安全面も配慮しながら授業を進めていきたい。

4 単元計画

時間	主な学習内容	時間	主な学習内容
1	オリエンテーション（基礎基本についての理解）	7	素振り②
2	剣道体験運動①	8	素振り③
3	剣道体験運動②	9	空間打突①
4	足さばき	10	空間打突②
5	礼法・足さばき	11	踏み込み
6	素振り①	12	まとめ

5 本時の計画（11／12）

(1) 内容：武道 剣道

(2) 目標：踏み込み技術ができるようになる。

(技能)

(3) 展開

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 8分	1 前時の確認をする（準備運動・素振りを含む） 2 本時の目標を提示する。	<ul style="list-style-type: none"> 前時までの活動が分かるよう、素振りのポイントを示範しながら説明する。 見通しをもって授業に取り組めるよう、目標を提示する。 <p style="text-align: center;">本時の目標： 中段の構えから踏み込み動作をつかって面打ちができる。</p>	
展開 35分	3 空間打突 <ul style="list-style-type: none"> 足さばき 踏み込み動作 4 面打ち（竹刀をつかった打突）	<ul style="list-style-type: none"> 生徒がポイントを理解できるよう、示範しながら説明する。 <p style="text-align: center;">発問： 面打ちに強い手の力は必要だろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> グループワーク <ul style="list-style-type: none"> 安全に基づ立ち（打たれ役）ができるよう、面の打たれ方を丁寧に説明する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> ポイント <ul style="list-style-type: none"> 足の動きに手を合わせる 手の力を抜き、肘を固定させて面を打つ 打突後も力を入れない。 </div> 5 面打ち（タイヤをつかった打突）	<p style="text-align: right;">【技能】</p> <p>踏み込み動作に手を合わせて面を打っている。 (観察)</p>
まとめ 7分	6 本時を振り返る。	・本時の内容を整理し次時の内容に触れる。	

〈授業説明〉

グローバルリーダーとして育成したい三つの資質の中で、基本的技能に焦点をあてた剣道の授業を実施した。本授業では、剣道の基本動作である「踏み込み」という技能を通して、どうすれば上手くいかをグループで考え、課題を解決することで、技能の定着を図った。その後、授業者が示範しながら、技能のつまずきを訂正し、形ができた後に、竹刀、タイヤを用いた「打突」を行い、技能の完成を図った。

〈参観者感想・意見〉

- ・指示が明確で分かりやすかった。
- ・目標や授業の流れが示されていたので見通しがもてた。
- ・グループワークで生徒が積極的に取り組んでいた。経験者がリーダーシップをとってグループをまとめていた。
- ・剣道の技術が定着していた。全員上手いと思った。
- ・先生が示範することで、生徒も分かりやすかった。
- ・剣道の特徴かもしれないが、復習の時間が長く感じた（素振り・空間打突）
- ・学んだ技能・知識を言語化することが定着につながる。授業ノートをつくればさらに定着するのではないか。
- ・防具を着けたときの授業が楽しみに感じた。
- ・先生の声かけで安全を留意したもののが多かった。
例 「縦と横の感覚をとってください」「打突のときに力を入れすぎないでください」「振り上げ動作の際に、後ろを気にしてください」「ここは危険なので、話をよく聞いてください」
- ・指導案が分かりやすかったが、もう少し具体的に書いてもいいのでは。

〈授業者感想〉

剣道の醍醐味は、技を高め勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、伝統的な考え方を学ぶことである。伝統的な考え方を授業前の号令や礼儀作法などを取り入れることで、定着しつつある。格闘技であるので、安全に留意し、きめ細かに声かけを継続したことで、相手を尊重する態度も理解してきている。本来、楽しさを一番体感できる「地稽古」「試合」を早い段階で取り入れればいいのだが、そこに至るまでの土台を育てるのに時間がかかるのが武道の特徴である。コロナ禍になる前は、いかに生徒の興味関心をもたせながら土台を育っていくかということを重要視してきた。だが、コロナ禍になり、防具を着けることができない日々が続き、改めて剣道を考える機会となり、技能と知識がつながったときに生徒の知的好奇心が満たされることを再確認できた。本授業で取り上げた「踏み込み」も、ただやり方を教えるのではなく、できるまでの過程を協働しながら探究することで、深い学びにつなぐことができた。

今後の課題として、さらに主体的に課題を発見・探究・解決する力を育むことがあげられる。剣道は生徒がすぐにできる競技ではないので、インプットとアウトプットのバランスを考え、授業改善を行っていきたい。

英語科「英語コミュニケーションⅠ」学習指導案

実施日時：令和4年6月30日(木)2校時

場 所：1年D組教室

対 象：1年D組

授業者：原田由佳

A L T：Kristopher Jackson

教科書：Element(啓林館)

1 単元名 Lesson 3 Contributing to Our Planet

2 単元の目標

バリのプラスチック問題についての英文を通じて理解したことを基に、身近な環境問題とその解決策について話し合うことができる。

3 単元と CAN-DO 形式での学習到達目標との関連

社会的な話題について、情報や自分の考えを効果的に話して伝えることができる。

【GRADE 5 話すこと〔発表〕】

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none">・若者の環境への取り組みについて書かれた説明文を読み取る技能を身につけている。・環境問題の現状について伝え合うことができる。	<ul style="list-style-type: none">・環境問題や、若者の環境への取り組みについて、絵や写真を見ながら概要を話して伝えている。・環境問題の解決のための手段について、自分の考えを伝え合っている。	<ul style="list-style-type: none">・環境問題や若者の取り組みについて、絵や写真を見ながら概要を話して伝えようとしている。・環境問題を解決するための手段について、自分の考えを理由とともに話して伝え合おうとしている。

5 単元観

本単元では、環境問題について学習する。Reading ではバリに住む姉妹がプラスチック問題を解決するために行った取り組みが紹介されている。本文を読み、ペアやグループで情報や意見をやり取りすることで、環境問題に対する理解や考えを深めるとともに、自分たちに何ができるかを考える機会としたい。

6 生徒観

男子15名女子25名のクラスである。身近な話題について考え方を伝えあう力が高く、ペアでの表現活動にも意欲的である。本単元では環境問題についての情報や意見の交換をする機会を設けることで、聞き手や状況に合わせて情報を効果的に伝える力を養っていきたい。

7 単元の指導と評価の計画(総時数:8時間)

主な言語活動等(○本時の内容)	評価
<ul style="list-style-type: none">・世界やインドネシアのプラスチック問題の現状を調べ、グループで共有する。・本文を読み、バリの若者がキャンペーンを進める経緯を理解する。○地域住民にプラスチック問題について教えることを想定し、前時までに得た情報を使って発表活動を行う。・本文の内容を理解し、若者が政府の政策を変えた経緯について説明する。・本文から読み取ったことを通して、自分が今環境問題のためにできることについての考えを話したり書いたりする。	<ul style="list-style-type: none">・活動の記録・ライティング課題

8 本時の学習(本時4/8)

(1) 目標

プラスチックごみ問題の現状について伝え合い、理解を深めることができる。

(2) 本時の展開

過程	学習活動	教師の支援及び留意点
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> ○ペアになり、提示された写真から思い出されることを伝えあう。 ○バリのプラスチックごみの問題や姉妹の解決に向けた取り組みについて確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○スクリーンに Scene1 と Scene2 に関連する写真を提示することで、前時までの内容についての記憶を喚起する。 ○数名の生徒を指名しながら発言を板書し、Scene1 と Scene2 の内容を全体で確認する。
展開 35分	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の学習課題を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> Explain the plastic garbage problem using visual aids </div> <ul style="list-style-type: none"> ○4人の班を編成する。 ○各班で前時までにまとめた情報を確認する。 ○異なる班のメンバー同士で集まり、準備したフレームを使って説明し合う。 ○元の班に戻り、自分が聞いた班の説明を1つ選んで紹介する。 ○プラスチックごみの写真を見て思いつく単語や文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の学習課題を提示する。 ○前時までの授業で作成した Jamboard のフレームを使って説明するよう指示する。 ○それぞれの活動を短い時間で区切り、全員の発表時間を確保できるよう留意する。 ○他班のフレームを使って紹介するように伝える。 ○レッスン最初の授業で使用した写真を再度提示して書くことで、自らの意識の変容に気づくきっかけづくりをする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>[評価]</p> <ul style="list-style-type: none"> ○プラスチックごみの問題の現状とその影響について話したり書いたりすることで、情報を整理して適切に伝えあっている / 伝え合おうしている。 (活動の観察・ライティング課題) <p>[思考・判断・表現／主体的に学習に取り組む態度]</p> </div>
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> ○振り返りシートを記入する。 ○ワークシートを提出する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ワークシートを回収する。

Lesson 3 Contributing to Our Planet Research Sheet

Class _____ No _____ Name _____

1st Class ①

3 Words

O

O

O

(at least) 1 opinion

Today's comments (date: /)

4th Class ③

3 Words

○

○

○

(at least) 1 opinion

Today's comments (date: /)

1st Class ②

Picture _____

Take notes about what you learned

4th Class ① Take notes about the information from other groups

From Group _____

From Group _____

From Group _____

4th Class ② Share what you learned in your group

令和4年度指導主事訪問 英語科研究協議会の記録

1. 研究授業について

- (1) 実施日 令和4年6月30日(木)2校時
- (2) 授業クラス 1年D組(1年D組教室)
- (3) 授業者 原田 由佳 / Kristopher Jackson
- (4) 単元名 Lesson 3 Contributing to Our Planet

2. 授業者からのコメント

原田先生

新課程の1年生への本授業を計画するにあたり意識したことは以下の4つ。

- ① ALTがいるからこそできることをする
- ② コミュニケーション活動の充実
- ③ 問題解決をするのに必要な経済的な知識を生徒に身につけさせる
- ④ ICTの活用

【事前の授業について】

はじめは“Bye Bye Plastics”的内容に沿い、登場する2人の姉妹に焦点をあててバリのプラスチック問題を深く取り上げることも考えた。しかし、本文をScene 2までしか読んでいないことから、本授業ではそれはできないと判断。そこで世界のプラスチック問題に焦点をあてることとした。

- ① 1枚の写真(海岸にプラスチックゴミが散乱している様子)を提示。写真から読み取れる3つのwordsと1つの自分の意見を書く「3 words 1 opinion」を実施。
- ② 世界のプラスチック問題に関連する写真を10枚生徒に提示。
- ③ Kristopher先生が問題提起をしながら10枚の写真に関して説明。
- ④ 生徒を10のグループに分け、それぞれ1つの写真についてChromebookを使用して調査。(15分程度しか時間がとれなかったが、日頃の探究活動により、生徒はインターネットを活用して必要な情報を得ることに慣れており、また、積極的に授業外の時間も使用していたようで、非常によく情報収集ができていた。)
- ⑤ “Bye Bye Plastics”に登場する2人の姉妹がバリのプラスチック問題にどう取り組んだのかを確認。

【研究授業の反省点】

- 単元の目標を世界全体のプラスチック問題に焦点をあてて設定したこと。
教科書に即してバリのプラスチック問題に焦点をあてていれば、“Bye Bye Plastics”に登場する姉妹2人に成り代わって、自分がどう行動できるかを考える活動につなげていけただろう。
- 振り返りの方法について、「3 words 1 opinion」の活動は簡単すぎたのではないかと感じている。
ただ、研究授業前に行ったときは、同じように3分与えても全く英文を書けない生徒がいたが、本時では書く量が増えていた。力の向上が見て取れた。

Kristopher 先生(意訳)

- 「リスニング・ライティング・スピーキング」の活動に尽力した。
- 写真を提示してその問題について考えさせる活動は、生徒には難しかったと思う。しかし、生徒たちは調査を経て考え方や英語力を改善できていた。
- 「スピーキング→ヒアリング→メモを取る→別のグループの内容を別の生徒に伝える」この活動はとてもよいものであった。

3. 他教員からのコメント

【良い点】

- プラスチック問題に関しては中等部の頃に夏季補習で取り上げたことがある。中等部から高等部につながるトピックであり、中等部から進学した生徒たちにとって、学習のつながりを感じることができるとてもよい活動だった。
- 短時間であっても生徒みなが英語でプレゼンができていて良かった。(決して中等部のころ英語ができる生徒たちというわけではなかった。)
- ICT の活用に関して、授業者の原田先生は事前に研究しながら授業を作り上げていた。
- 毎回このような授業を行うのは難しいかもしれないが、1度経験したことは、次はもっと短時間でできるようになる。今回のような授業を経験させるのはとてもよい。
- 新課程で ICT を活用した先頭を行くチャレンジングな授業であった。先頭を走る人は大変であるが、後について行く人は、先頭の人のまねができる。とてもありがたい授業。
- ワールドカフェ形式の授業においてジャムボードの使用が非常に効率的でよかったです。
- 授業のテンポがよい。指示が明確。ICT の活用が効果的で、座席移動なども短時間で行えていた。
- 生徒の意見に関して即座にコメントしたり、正しい英語に訂正したり、Kristopher 先生がいるからできる活動ができていた。
- 「書く・聞く・話す」チャンスを生徒に与えることは大事であると学ぶことができた。
- Lesson の最後に、Lesson のトピックに合わせてディベートや感想などを生徒に話し合わせる活動は大事である。本授業の写真を与えて、そこからプレゼンテーションを持って行くのは手間がかかつただろう。
- 3 words 1 opinion の活動について、リテリングの活動の際にキーワードやフレーズをバーッと書かせる活動をよくするが、たくさん書きすぎるとリテリング活動は難しくなる。「何ワードで」と指定してキーワードを書くようにするのはとてもよい。
- 授業のねらいが明確。事前授業で、初めてプラスチック問題の写真を見たときの意見と、本授業でプレゼンを聞いて知識を深めてからの意見とで、目に見える形で意見が変わっていた。この「意見が変わる」というのがねらいであったことがはっきりわかる。
- 原田先生が生徒の意見をひきだし、Kristopher 先生がその意見のフィードバックをする。T.T.の役割分担がとてもよかったです。
- 原田先生の ICT を活用した授業そのものが生徒のプレゼン活動の良いモデルになっていたと思う。
- 4人1グループで、生徒は協働的な学びあいができていた。
- 生徒は英語で話すことを苦にしていない。日頃の授業の成果であろう。

【改善点】

- グループによってはジャムボードに書いているメモが長すぎて、メモを読むだけで終わっていた。
英語を読むのではなく、自分の力で英語にし、伝えるようにさせたい。
- 生徒の振り返りの仕方について、フリーコメントを書くだけではなく、いくつか項目に対し「わかった・わからなかった」「できた・できなかつた」などの自己評価を記すところがあつてもよいのではないか。
- ALT にもっと話をさせて活用してもよいのではないか。
- 元の班に戻り、自分が聞いたプレゼンの一つを選んでリテリングをする活動に関して、他班のものを1分で説明するのは難しいだろう。ジャムボードのメモの長さがまちまちであつたことも一つの要因。英語のできる生徒でさえもうまく説明ができないまま1分間が過ぎていた。正確に「伝える」ことに重きをおくか、正確ではなくても1分間「話す」ことに重きをおくか、を生徒に示す必要があつただろう。

4. 山内由佳主任指導主事より

【良い点】

- 生徒の様子をしっかりと見ている。
- All English Class かつ生徒たちもたくさん英語を話しており、今まで見た高校の授業の中で一番良い。
- 生徒の間違った英語を、Kristopher 先生が直してリテリングしているのがよい。
- 生徒の意見の変容が目に見えるのがとてもよい。
- 中等部からあがってきた生徒であるとのことだが、日頃の実践がみてとれる良い授業であった。

【改善点】

- 元の班に戻り、自分が聞いたプレゼンの一つを選んでリテリングをする活動において、生徒たちはジャムボードに準備したキーワードの長さが班によってまちまちであつたために、キーワードが短い班のものは、リテリングをする際に選ばれていなかつたのが残念。キーワードが短い班のものはリテリングが難しかつたのだろう。
- 3 words 1 opinion の意見の発表に関して、もう一步踏み込んだ質問をして欲しい。
パーソナライズされた情報があると生徒は自身にひきよせて問題を考えられるようになる。例えば、「ゴミを減らすためにフィルターを使う」という生徒に対して「洗濯機でゴミをとるフィルターを家で使ってますか?」。「ゴミを減らしていくと思う」という生徒に対して「どうやって?」など。

II. 校 内 研 修

実践的指導力習得研修（高等学校）

教諭 齊藤 智也

1 はじめに

教育公務員特例法により、初任者研修が義務付けられており、学級や教科・科目の指導等を担当しながら、実践的な指導力を身に付け、教員としての使命感を養うことが求められている。

本県では、昭和57年度以来「豊かな人間性を育む学校教育」の実現を目指して、「思いやりの心を育てる」「心と体を鍛える」「基礎学力の向上を図る」「教師の力量を高める」ことを目標に、学校教育の充実・発展に取り組んでいる。「第3期あきたの教育振興に関する基本計画」（令和2年3月策定）において、「ふるさとを愛し、社会を支える自覚と高い志にあふれる人づくり」を、目指す教育の姿として掲げ、「教育立県あきた」の実現を図っている。

実践的指導力習得研修は、初任者研修を受講した教員に対し、「秋田県教職キャリア指標」及び「秋田県教職員研修体系」に基づき、実践的指導力や使命感を養うとともに、個々の教員が豊かな識見を身に付け、主体的に自らの力量を高められるよう実施している。

2 概要

【高等学校研修一覧】

	校内研修	校外研修
実践的指導力 習得研修 (採用2年目)	年間15時間程度	2日間 (総合教育センターで実施)

【校内研修】

校内研修は、原則として所属する学校において、より実践的な授業研修及び一般研修を年間15時間程度実施する。

授業研修は本研修1年目に1回以上実施する。授業研修に係る研修項目は1回につき計5時間程度とする。なお、本研修2年目に授業研修を実施する場合は、1回(5時間程度)までを一般研修の時数としてカウントすることができる。

一般研修は、授業研修以外の次の領域①～④に係る研修を指し、授業研修の実施時数とは別に本研修1年目に10時間程度、2年目に15時間程度実施する。

【①基礎的素養 ②マネジメント能力 ③生徒指導力 ④教科等指導力】

【校外研修】

A - 7		実践的指導力習得研修講座(高等学校2年目)	
研修の目標		対象	
学校教育目標に基づいた教育活動への意識を高め、学習指導やホームルーム経営、生徒指導等についての実践的指導力を身に付ける。		<ul style="list-style-type: none"> ・小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の教諭として採用されて2年目で、今年度高等学校に所属する教諭 ・過年度の該当者で未受講者 	
期	日 時	研修内容	指標における主な項目
I	5／19(木)	<ul style="list-style-type: none"> ○保護者対応と連携 ○学校組織の一員として —学校教育目標とホームルーム経営— ○「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業構想と実践① 	生徒指導力③ マネジメント能力② 教科等指導力①②
II	8／25(木)	○「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業構想と実践②	教科等指導力①②

3 研究授業

今年度、研究授業を行ってきた中で秋田県総合教育センターで行った校外研修の授業実践の内容を記載する。

高校では今年度から新学習指導要領の内容が年次進行で始まるに伴い、今回は保健の「喫煙と健康」を新学習指導要領の視点で授業実践した。新しい評価規準で、授業を評価し授業内容や単元間のつながりを行ってみた。その際に、中等部では新学習指導要領で授業が始まっているので、中等部の先生とも協議を重ね、新しい教科書の内容へ関連付けながらの指導案作成を行った。授業ではパワーポイントや動画を活用するなどのICTの活用で授業を進め、生徒間の言語活動と発表の場面、全体での共有の流れで行った。

授業後の他教科の先生との協議では他教科からの視点で気づいたこと、生徒の授業参加の仕方が各教科で違うことを知ることができてとても良い刺激になった。生徒の変容を把握するための手立てや時間の設定が必要であること、本時の目標を常に掲示しておく方法などの板書の仕方の工夫などの意見があがつた。一人一台端末の活用では、授業中にアンケートや振り返りシートを配信し即座にフィードバックする授業の進め方など、とても参考になることが多かった。生徒の意見の集約・共有や次時につながる授業構成の再考についてていきたい。

4 まとめ

今年度の一年生から新教育課程で授業が始まり、毎時間の授業はもちろん、評価規準も熟考しながらの教育活動を行っている。これまでの教育課程での授業で大きく変化したことは保健体育科では見られないが、授業の前後で生徒の変容をより意識した授業を行った。

一人一台端末の導入や校内無線LANの整備が秋田県では進められていることもあり、ICTの活用を一つのテーマとして実践し、教科指導においてパワーポイントでの授業やグーグルクラスマートで生徒の意見の集約と共有を行ってみたりもした。

今年度は実践的指導力習得研修として、初任者研修で得た知識・技能を教科指導や部活動指導等で行っている。秋田南高校はグローバルハイスクールネットワーク事業の参加校として探究活動にも力を入れている学校なので、前記のICTの活用も含めて様々な視点で教育ができる力を身に付けていきたい。

初任者という立場から実践的指導力習得期という教諭の立場になり、より責任感をもって日々の教育活動に携わっている。学級経営や教科指導、部活動指導など、校務分掌は多岐にわたるが周囲の先生方との連携を軸に充実した教育活動ができていると感じる。現状に満足することなく時代の変容に対応出来る力を構築していきたい。

第1学年E組 保健体育科 学習指導案

学 校 名 秋田南高等学校
指 導 者 齊藤 智也
授 業 日 8月25日(木) 1校時

1 単元名 (1) 現代社会と健康 (2) 喫煙、飲酒、薬物乱用と健康

2 本時の計画

(1) ねらい 喫煙は生活習慣病などの要因となり心身の健康を損ねることを理解できるようにする。

(知識)

(2) 展開

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 8分	1 秋田県内で喫煙に工夫をしている施設や取り組みを考える。 2 本時の目標を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の実生活から気づいたことや気になることを示す。 ・学習課題を示す。 	
本時の目標： 喫煙が人体に及ぼす健康被害を理解できるようになる			
展開 35分	3 喫煙の影響を理解する。 <ul style="list-style-type: none"> ・主な有害物質と影響についてプリントに記入する。 ・受動喫煙 ・妊婦への影響 4 喫煙の開始要因と継続要因について考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の様子を観察し、必要に応じて支援する。 ・日本と世界の死因の違いから、たばこ煙中の影響は身近なものであることを理解させる。 ・個人的要因と社会的要因を示す。 ・喫煙が習慣化するとやめられなくなることを説明する。 	<p style="text-align: right;">【知識】</p> <p>喫煙は生活習慣病などの要因となり心身の健康を損ねることを言つたり、書き出したりしている。</p> <p>(プリント、観察)</p>
まとめ 7分	5 個人・社会環境への喫煙対策を考える。 <ul style="list-style-type: none"> ・日本と海外の喫煙対策を考える。 ・たばこのパッケージの変化について考える。 6 本時を振り返る。 <ul style="list-style-type: none"> ・学習内容をまとめ、整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・海外と日本の喫煙対策の違いを紹介する。 ・生徒の様子を観察し、必要に応じて支援する。 ・生徒の意見を共有する。 ・本時の内容を整理し次時の内容に触れる。 ・プリントを回収する。 	

3 協議の視点

主体的・対話的で深い学びを実現するために適切な授業であったか

令和4年度 ICT職員研修 実施記録

教育情報部 教諭 關 友 明

1 概要

昨年度から導入された一人一台タブレット端末や、Google Workspace for Education 等について、昨年一年間を通して、各教科の授業や学校行事、進路指導、生徒会活動など、様々な場面で活用が広がってきていている。教育情報部では、さらに校務の負担を軽減しつつ、生徒にとって有用な活用になることを目指して、より多くの教員が活用できるよう職員研修を企画した。これが6月に実施した「ICT研修」である。

また、年度途中になって全県的に新型コロナウイルス感染症が拡大したことを受けて、適宜リモート授業を実施できるようにするため、教務部と合同で全職員を対象とした研修を企画した。これが「オンライン授業研修①・②」である。

2 実施記録

(1) ICT研修

日 時 令和4年6月中旬（第1回定期考查期間中）

①6月16日(木) 14:50～15:50

②6月17日(金) 13:30～14:30

場 所 会議室

参加者 本校教職員（①22名、②13名）

ねらい Chromebook 端末や、Google Workspace for Education の活用事例から、授業におけるICT活用指導力向上を図る。

講 師 教育情報部 教諭 關 友明

内 容 授業におけるICT活用の事例紹介および体験

・Google スライドを用いた生徒の発表

・Google Classroom を使った課題配信と提出

・Classi を用いた問題演習

(2) オンライン授業研修①

日 時 令和4年8月30日(木)～9月2日(金)放課後(または校時内の各自の空き時間)

場 所 放課後:2年D・E・F組教室、校時内:選択教室1～5の開いている教室

参加者 中等部・高校の授業を行うすべての教員

ねらい

教育委員会からの通知「(教高-1085)夏期休業終了後における新型コロナウイルス感染症の感染防止対策について」に基づき、今後の臨時休業等の措置を想定し、当該期間における生徒の学習保証のために、オンライン授業の準備を進める。具体的には、休校等で生徒が学校(あるいはクラス)にいない状

況において、教員が教室から授業を配信し、生徒は自宅にて Google Meet で受講する、という形を想定し、授業配信の練習を行う。通常授業を行うすべての教員が、授業配信の練習を行っておくことで、万が一、臨時休業となった際にも、スムーズにオンライン授業に移行できるようにする。

研修方法

- ・全教職員分の Google Meet の会議コードを作成し、全職員・生徒に周知する。
- ・数名の教員でグループを作る(各自の希望日に基づいて教務部にて編成する)。
- ・グループ内で、「授業者」役と「生徒」役を決める。
- ・「授業者」役が、教室から Google Meet に接続して授業を配信する。
- ・「生徒」役は、「授業者」の教室の周辺(または職員室)にて、Google Meet に接続して授業を受講する。
- ・「授業者」役は、カメラの位置や黒板の映り方、授業時の声量・板書の文字のサイズなど、「生徒」役と確認し、授業配信のイメージをつかむ。
- ・必要に応じて、カメラやマイクのオン／オフ、チャットや画面共有などを試してみる。
- ・ひとりおり練習したら、「授業者」役と「生徒」役を交代する。

(3) オンライン授業研修②

日 時 令和4年9月26日(月)・27日(火)・29日(木) LHRにて

高3: 26日(月) 13:25 13:55 (定期考査終了後)

高2: 27日(火) 15:25 16:15 (7校時 内)

高1: 29日(木) 15:25 16:15 (色別会議終了後)

場 所 受信側(生徒・副担任):各クラス教室

配信側(クラス担任):中等部体育館棟 選択教室1～6

参加者 高1～3全クラス生徒(学年ごとに実施)・教員

ねらい 休校や学級閉鎖等で生徒が登校できない状況において、教員が教室から授業を配信し、生徒は自宅にて Google Meet で受講する、という形を想定し、生徒及び教員が授業配信および受信の練習を行う。

内 容

- ・事前に、生徒に「会議コード一覧」、「生徒用マニュアル」、「タブレット端末の使い方について」を配付する。
- ・クラス担任は、選択教室から、教員用 Chromebook で Meet に接続する(授業配信)。
- ・生徒は、クラス教室にて、自分の Chromebook で Meet に接続する(授業受信)。
- ・Meet 接続後は、以下のことを確認する。
 - ①【担任】クラスの生徒全員が接続できており、生徒の姿が映っていること。
 - ②【生徒】配信側の映像(担任の姿や板書など)が見えていること。
 - ③【生徒】配信側の映像をピン止めして拡大表示すること。
 - ④【生徒】配信側の音声が聞こえていること。
 - ⑤【担任・生徒】挙手ボタン・チャット・画面配信等について、生徒が対応できること。

- ・最後に、副担任は、以下の点について生徒に説明する。
 - ①万が一の休校等に備え、できるだけ普段から端末を持ち帰るようにする(必ず毎日持ってくる)。
 - ②自宅に自由に使えるPC等がある場合は、特に持ち帰らなくてもよい。
 - ③自宅のWi-Fiへの接続の設定は、(保護者の許可を得て)各自で行う。
 - ④持ち帰った端末の充電は各自、自宅で毎日行う。充電器やケーブルは各自で用意する。
 - ⑤実際にリモート授業を行う場合、時間割に合わせて1時間ごとに、授業担当の先生の「会議コード」に接続することになるので、「会議コード一覧」は紛失しないようにすること。

3 研修を終えて

ICT研修では、おもに授業における Classroomの活用法を体験した。オンラインで課題配信や回収、評価ができるのは、リモートの状況でなくても活用場面が多く、便利である。実際、研修終了後、複数の教員が、授業などに活用するようになった。

オンライン授業研修は、感染拡大の状況に伴って急遽進められた研修であったが、先生方に趣旨をご理解いただき、スムーズに実施できた。配信側については、教員間でスキルや経験の差が大きかったが、教員同士のグループを教科ごとに編成したことで、各教科・科目の特性に応じて教員間でアドバイスし合って進めることができた。受信側である生徒については、学年ごとに教室で実施したこと、校内 Wi-Fi の回線の脆弱さから動画に遅延やカクつきが見られたり、生徒がミュート操作をし忘れてハウリングが起こつたりというトラブルもあったが、概ね順調に実施できた。

研修終了後、高2の修学旅行終了後に自宅待機期間が発生したため、実際にリモート授業を行う機会があった。実際にやってみると、生徒の画面上で黒板の字が見えにくいなどのトラブルもあったが、事前に研修を行っていたことで、何とか授業を行うことができた。

コロナ禍の中で、休校や学年閉鎖等、生徒の学習機会が失われかねない状況は常に起こりうる時代である。生徒に学びを確保するために、ICTの活用をためらうことなく進めていくことは、今後もさらに重要になってくるだろう。また、時代の流れとして、ICTは文房具と同じように、学校教育に欠かせないものになってきている。教員も生徒もそうした流れをしっかりととらえ、うまく波に乗ってよりよい学びを教育現場に適切に取り入れていくことが必要である。引き続き、研究と修養に努めていきたい。

令和4年度 第1回ICT研修

教育情報部

日 時 令和4年6月16日（木） 14:50～15:50

17日（金） 13:30～14:30

場 所 秋田南高校 会議室

1 研修テーマ

授業におけるICTの活用

～まずは、使ってみよう～

2 ICT研修実施の背景

社会生活の中でICTを日常的に活用することが当たり前の世の中となる中で、・・・学校の生活や学習においても日常的にICTを活用できる環境を整備し、活用していくことが不可欠である。・・・これから学びにとってICTはマストアイテムであり、ICT環境は鉛筆やノート等の文房具と同様に教育現場において不可欠なものとなっていることを強く認識し、その整備を推進していくとともに、学校における教育の情報化を推進していくことは極めて重要である。

「教育の情報化に関する手引 -追補版-（令和2年6月）」文部科学省

3 ICT活用の考え方

○ 1人1台タブレット端末の活用

- ・「いつでも使えるように」する
- ・必要なのは「使ってはいけないとき」の指示
- ・基本的なルール「学習のためのみに使う」を伝える

○ ICTは、魔法のアイテムではない

- ・ICTを使えばすぐ効果が出るというわけではない
- ・「日常的な活用」の継続が、「効果的な活用」につながる

○ ICTで何ができるのか

- ・効率化 … デジタル教材、ペーパーレス、リモート学習、
- ・可視化 … プレゼンテーション、協働的な学び、
- ・個別最適化 … 理解度に合わせた学習、繰り返し、学習履歴（ログ）の蓄積と活用、

○ ICTは、教員も「一緒に学ぶ」

- ・まずは、使ってみよう

4 研修内容

(1) 授業における ICT 活用事例の紹介

① Classi を用いた問題演習

マーク演習と解説 (WEB テスト / アンケート)

② Google スライドを用いたプレゼンテーション発表

Chromebook 端末を使った調べ学習とプレゼンテーション

③ Google Classroom と Google ドライブ を用いたグループ活動

探究活動のグループ研究 …ファイルの共有と分担作業

④ Google Classroom を用いた課題配信

プリントの配付 (PDF)

英作文添削 (Google ドキュメント)

音読テスト (動画)

授業の振り返り入力 (Google フォーム)

(2) 実践 ~ Google Workspace for Education の授業への活用

① Google Workspace for Education とは

- ・Google が提供している、児童・生徒や先生のためのクラウド型教育支援サービスの総称
- ・R3～ 秋田県教育委員会が契約。県立学校の教員・生徒が使用できる。
- ・各種アプリ … Classroom, ドライブ, Meet, Jamboard, フォーム, Gmail, グループ, スライド, ドキュメント, スプレッドシート, カレンダー, …
- ・インターネット環境があれば、いつでもどこでも使用できる。
Chromebook, 職員室のノートパソコン, スマートフォン, …

② Google Classroom を用いた課題配信 を使ってみましょう

(※操作方法詳細は別紙)

- 1) Classroom の起動
- 2) クラスの作成 (教員)
- 3) クラスへの招待 (教員)
- 4) クラスへの参加 (生徒)
- 5) 課題の配信 (教員)
- 6) 課題の提出 (生徒)
- 7) 提出状況の確認・評価・返却 (教員)

お試し課題： 本日の研修についての感想・意見等

5 参考

(1) ダミー生徒アカウント

・秋田 南太郎
e-akita ID : mnm2020999@e-akita.ed.jp
パスワード : a3735050

・秋田 南子
e-akita ID : mnm2020000@e-akita.ed.jp
パスワード : a3735050

※授業の事前準備などに活用してください。

「生徒アカウントからどう見えるか」「生徒はどう操作するか」を体験できます。

(2) 活用事例紹介サイト

・文部科学省 StuDX Style (スタディーエックス・スタイル)
各教科等における1人1台端末の活用
<https://www.mext.go.jp/studxstyle/index2.html>



・文部科学省 各教科等の指導におけるICTの効果的な活用に関する参考資料
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/mext_00915.html



・文部科学省 Google for Education 活用に関する動画・資料リンク集
https://www.mext.go.jp/content/20201109-mxt_jogai01-000010310_001.pdf



・秋田県教育委員会 秋田わか杉学びネット 民間企業等によるICTの効果的な活用
できるGoogle for Education 活用事例集
https://common3.pref.akita.lg.jp/manabi/to_teachers/online



III. 研修講座等受講報告

B-13 高等学校道徳教育推進研修講座参加報告

教諭 松 井 春 菜

1 はじめに

近年、グローバル化や科学・医療技術、情報通信技術等の進歩、さらに日本では少子高齢化とともに様々な事柄によって、社会は大きな転換点を迎えており、そのような社会の中で学校教育も当然ながら影響を受けている。今回の研修では、このような状況をふまえて講義と事例報告、協議が行われた。

2 研修内容

【講義 －道徳教育の確認と現在求められている道徳教育－】

現在の学校教育を道徳教育の観点、つまり生徒の人間関係形成能力、社会や課題への適応能力といった観点で考えた場合、深刻ないじめが国内各地で度々見られることは非常に残念である。このような状況下で、道徳教育の果たす役割はますます重要になっている。平成27年には学習指導要領の一部改正により、小・中学校では従来の「道徳の時間」(週1時間)は「特別の教科 道徳」(引き続き週1時間)として新たに位置づけられている。高等学校では学習指導要領に「人間としての在り方生き方に関する教育を学校の教育活動全体を通じて行うこと」とあり、人間関係が広がる高校生の時期に、生きる意味や自己と他者・社会との関係、人生観や価値観の形成について深く学ぶことが目標として掲げられている。

【事例報告と協議 －道徳教育推進のための取り組み－】

1 実践発表A（横手清陵学院高校）

実践①「生きること」・・・3.11に関する動画、その他資料を活用。

実践②「コミュニケーション」・・・LINEワークショップ（HPにあり）を資料として活用。

※年1回、LHRに学年集会の形式で実施。負担感の無い形で実施している。

2 実践発表B（秋田工業高校）

実践①「交通安全」・・・当時交通事故件数が多かったため、道徳教育の要素を取り入れながら状況改善を図った。

実践②「貢献とは何か」・・・社会貢献、地域貢献とは？進路指導と道徳教育を融合させた形で実施。※年1～2回、LHRで実施。他に「タブレットの使い方」等のテーマでも実施。

3 協議（各学校での取り組み事例の報告と質問等）

3 まとめ

各学校で生徒の実態は異なるものの、生徒を取り巻く社会環境は同じである。われわれ教員は、生徒が抱える困難や心を動かされる経験に寄り添いながら、生徒の内面の成長を重視し支援していくことが求められている。

B—15 小・中学校特別活動研修講座を終えて

教諭 鎌 田 拓 也

1 研修の目標

特別活動に関する基本的な事項と実践の在り方について理解を深める。

【期日:令和4年6月30日(木) 場所:秋田県総合教育センター】

2 研修の概要

(1)魅力ある特別活動を目指して 一特別活動充実のための取組一 <講義・実践発表>

① 互いのよさを生かし、協働して よりよい学級・学校生活をつくる子どもの育成を目指して

～学級活動の内容(1)を中心とした2年生における実践の紹介～

大仙市立四ツ屋小学校 教諭 鈴木 真紀子 氏

成果と課題：活動経験の積み重ねが主体性を育む 多様なメンバー構成が誰とでも協力し合える
関係性につながる 一人一人が活躍する機会をもつことで自他のよさへの気づきにつな
がる 振り返り活動の位置づけを「がんばりの自覚」・「課題意義」・「実践意欲」とした

② 自主的、実践的に集団活動に取り組み、資質・能力を育むことを目指した特別活動

大館市立下川沿中学校 教諭 田畠 政樹 氏

1) 下川沿中学校のふるさとキャリア教育(一人一人のキャリア形成と自己実現を目指して)

2) 比内中学校の生徒会活動(主体的に解決しようとする生徒の姿を目指して)

3) あたたかな人間関係づくり(認め合い、互いのよさを生かす人間関係を目指して)

③ ICTの活用

秋田県総合教育センター 指導主事 森川 剛 氏

1) オンライン:他校との交流、学級閉鎖・分散登校、話し合い活動(スライド・映像・意見の可視化)

2) 学級や学校における生活づくりへの参画

・「活用するため」だけの活動にならないように留意

・特別活動の目標、内容に合ったもの

・学習過程における活用場面を検討し、効果的に活用

(2)特別活動を要としたキャリア教育の推進 <講義>

文部科学省中等教育局教育課程課 教科調査官 長田 徹 氏

○キャリア教育とそれを進める上で必要なカウンセリングにおいて、「学ぶ意義」を理解させ、「自分のよさ
や可能性を認識」することが意図されたプログラムが必要である。

(3)特別活動の課題と改善策の具体化 <協議・発表>

秋田県総合教育センター 指導主事 森川 剛 氏

① 自校の学級活動を充実させるための解決策を考える

② 解決策の中から更に展開したい解決策を選択し深める

③ 解決策を共有し、自校の課題解決のための参考とする

④ 自校の特別活動の全体計画や学級活動の年間指導計画をチェックし、よりよい計画になるよう、充
実・発展させたりするための糸口をつかむ

3 まとめ

小・中学校特別活動研修講座に参加し、本校で進められている「キャリア教育」に関し、他の中学校での
実践等と比較しながら研修を進めることができた。

※横手清陵学院中学校の「特別活動全体計画」を参考に本校計画の改善も必要と考える。

センター研修B講座 「育成する資質・能力から考える美術の授業」報告

教諭 平野 則夫

1 はじめに

本講座の概要は次のとおりである。

1 期日:令和4年9月22日(木)

2 場所:秋田県総合教育センター(1階大研修室)

3 研修の目標:「具体的な指導事例を参考にしながら、校種間を貫いて育成する資質・能力について考え、実践的な指導力を高める。また、実際に浮世絵や工芸作品に触れ、美術鑑賞の授業について理解を深める。」

4 受講者:中学校から12名、高校から4名の合計16名

5 内容:

① <講義・協議> これからの美術科・芸術科(美術)の授業づくり

秋田県総合教育センター 指導主事 小森哉子氏

② <講義・協議> 美術の力について

秋田公立美術大学 美術教育センター 教授 尾澤勇氏

2 講義・協議について

【これからの美術科・芸術科(美術)の授業づくり】

1 小森指導主事から新学習指導要領の芸術科改定の趣旨、具体的な方向性、要点について中高それぞれの確認があり、三つの柱に基づいた目標の整理、美術授業の学びのプロセスについての解説は、イメージ図や弁図で理解を深めることができた。

2 「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実による授業改善」について、どのようにICTの活用と結びつかるかグループで協議して、中高の実践事例を通じて共有することができた。

【美術の力について】

尾澤教授による「造形的な視点で捉える」素材や技法の体験鑑賞は2つのプログラムが組まれた。

1 「浮世絵の比較による鑑賞」は、同一作者の作品を比較し、木を見る視点、森を見る視点で鑑賞することで、それぞれの作品の表現の工夫や技術の高さ、さらに共通性を探求することができた。

2 「工芸の比較による鑑賞」では、お椀と酒器を数種類ずつ用意され、見た目だけではなく、触ってみた感じ、さらには氷水を入れた実用的な状態を体験させてもらった。好みや感覚的な個人差はあるものの素材の違いを感じることはより生活を楽しむきっかけとなる。

3 まとめ

勤務校においてひとりで授業を進める芸術科教員にとって、このような内容の講座に参加できることは貴重な時間と経験であり、今後の授業実践に大いに役立てていかねばならない。一つでも多く研修に参加して、知識や経験が授業に活かされるようにしたい。

センターB講座報告「各教科等の指導における資質・能力の育成に向けた言語活動の充実」

教諭 石井 淳

1 はじめに

「言語活動を位置付けた指導の実際」について、講義を受けた上で各校種に分かれて協議の形式で研修が進められ、その後は「各教科等の指導における資質・能力の育成に向けた言語活動の充実」について講義を受けた。

2 言語活動を位置付けた指導の実際（講義・協議）

- | | |
|-------------|--|
| 【内容】 | 1 「言語活動の充実」の背景
2 「学習指導要領」と「言語活動の充実」
3 言語活動の設定のポイント |
|-------------|--|

【研修のねらい】

「言語活動の充実」についての基本的な考え方、指導と評価のポイントを確認し、各教科における資質・能力の育成に向けた指導力の向上を図る。

国内外の学力調査の結果から、文章の内容と資料の情報を関係付けて正しく読み取る力や、情報活用力に課題があることが分かった。同時に、これから時代に必要となる新しい学力を育成する手立ての一つとしてクローズアップされるようになる。

言語活動の基盤となるものは、数式などを含む広い意味での言語である。要となる国語科だけでなく、例えば理科の観察・実験レポートや、社会科の社会見学レポートの作成や推敲、発表・討論などすべての教科で取り組まれるべきものである。そうすることで子どもたちの言語に関する能力は高められ、思考力・判断力・表現力等を効果的に育成することができる。

思考力・判断力・表現力等を育むためには、①体験から感じ取ったことを表現する、②事実を正確に理解し伝達する、③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする、④情報を分析・評価し、論述する、⑤課題について、構想を立て実践し、評価・改善する、⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させること、が重要である。

言語活動を設定する際は、指導のねらいと言語活動との関係がはっきりせず、どのような力が付いたか不明確な場合があるため、注意が必要である。意図を持った位置付けをして、話し合いやペアワークが形骸化したり、画一的になつたりしないように配慮しなければならない。言語を基盤とした外化（知識のOUTPUTのために、内化（知識のINPUT）うまく往還させる取り組みを、長期的な見通しを持って繰り返すことが大切である。

3 まとめ

この研修に臨む以前から、言語活動はあくまで手段の一つであり、授業の目的ではないという認識はあった。だが、それは国語以外のことであり、国語では言語活動は目的（評価の対象）になるということを今回の研修で深められた。そのことを踏まえ、今後は、評価の対象としての言語活動のあり方について更に研鑽を深め、他の国語科の教員や、他教科の教員にそのことを伝えていきたい。

IV. 探究活動の取り組み

スーパーグローバルハイスクール（SGH）ネットワーク事業について

探究活動部主任 教諭 關 友明

1 SGHネットワーク事業とは

秋田南高校は、平成27年度より、5年間にわたって、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール（SGH）指定校」として、探究的な学びを通してグローバルリーダー育成に取り組んできた。令和3年度からは、あらたに始まった「SGHネットワーク」事業の参加校として、SGHの取組を引き続き実施する高等学校等が参加するネットワークを構築することとしている。本事業の設置期間は3年間である。

SGHネットワーク参加校は、目指すべきグローバル人物像を設定し、その育成のための発展的なカリキュラムを編成し、国内外の高校・大学・国際機関等との連携により、より実践的で高度な学習活動が行うこととしている。また、生徒の主体的な学びを促すものとして、グループワーク、ディスカッション、論文作成、プレゼンテーション、プロジェクト型学習等の手法を効果的に取り入れることが求められている。

2 本校の探究活動について

本校が育成を目指すグローバルリーダーとは、身に付けた知識・技能を活用して、世界や日本、地域の諸課題を論理的に考察し、他者と協働しながら解決に向けて実践・発信していくことができる人間である。身に付けることのできる資質・能力として「基本的知識・技能・習慣」、「探究力」、「協働力」の3つを設定している。特に「探究力」については具体的に、課題設定能力、課題探究能力、論理的思考力、プレゼンテーション能力、実践力の5つと捉えている。上記の資質・能力については学校の教育活動全体で育成するものとして、各教科等の年間指導計画に位置付けている。

こうしたグローバルリーダーを育成するため、「総合的な探究の時間」において、全生徒を対象とした探究活動を各学年で行っている。全体のテーマを「現代的諸課題の解決と学術の探究～ふるさとや世界に貢献するグローバルリーダーへ～」として、多様なテーマについて研究しながら、グローバルリーダーに求められる資質・能力の育成を図っている。

高1「国際探究」ではSDGsをテーマにグローバル課題の解決策を提案するグループ研究を行って、探究活動の一連のサイクルを全生徒が経験する。高2～3では2コース選択制として、「総合探究」コースでは、自身が将来深めたい学問分野について個人で研究する。高い進路目標をもった生徒を対象に選抜する「学術探究」コースでは、大学等との外部連携により、幅広い社会課題や学術的問題を専門的にグループで研究する。特に高2では1単位増として、発展的に探究に取り組むこととしている。



3 今年度の取組

【各学年の探究活動 実施記録】

①高1 国際探究

4月 7 日	オリエンテーション講座・探究活動について
4月 7 日	探究活動前年度優秀グループ発表 参観
4月 14 日	探究スキル講座Ⅰ・協働力
4月 21 日	探究スキル講座Ⅱ・課題設定能力～課題意識をもつ～
5月 12 日	SDGs入門講座 講師:JICA 東北 秋田デスク 国際協力推進員 野口 聰子 氏
5月 19 日	探究スキル講座Ⅲ・課題探究能力～情報の選択と収集～
5月 26 日	探究スキル講座Ⅳ・課題探究能力～論文の読み方～
6月 2・9 日	専門講座に向けて
6月 23 日	専門講座 一般社団法人ドチャベンチャーズ 代表理事 柳沢 龍 氏 一般社団法人フードバンクあきた 代表理事 林 多実 氏 秋田大学大学院理工学研究科准教授 カビール ムハムドウル 氏 秋田プライドマーチ実行委員会共同代表(国際教養大学) 伊藤 月菜 氏
7月 7 日	高3「総合探究」代表発表会参観
7月 14・21 日	レポート作成について
(夏期休業中)	個人レポート作成
9月 1日	個人レポート発表会
9月 15 日・10月 6 日	グループ編成・研究テーマ設定
10月 13 日	研究概論講座 講師:秋田県立大学 理事兼副学長 吉澤 結子 氏
10月 20 日	高2「学術探究」公開成果発表会 参観
10月 27 日・11月 10 日	グループ別探究活動(フィールドワーク準備)
11~12月	班別フィールドワーク
11月 17 日・24 日	グループ別探究活動
12月 8 日	プレゼンテーションセミナー 株式会社ソフトアドバンス 代表取締役 菅原 直 氏
12月 15 日	グループ別探究活動
1月 19 日	発表準備
1月 27 日	中間発表会
2月 5 日	プレゼン班別指導 株式会社ソフトアドバンス 代表取締役 菅原 直 氏
2月 9 日	発表準備
2月 27 日	成果発表会
3月 2 日	1年間の振り返り
3月 16 日	次年度コース別ガイダンス

②高2 学術探究

4月7日	探究活動前年度優秀グループ発表
4月14・21・28日	グループ編成・研究テーマ検討
5月11・12・18日	テーマ検討・先行研究レビュー
5月26日	研究テーマ発表会
6月1・2・9日	グループ研究推進
6月22日	イングリッシュセミナーに向けて
6月26日	English Seminar 講師 本校 ALT クリストファー・ジャクソン
6月29・30日・7月6日	グループ研究推進
7月7日	高3「総合探究」代表発表会参観
7月13・14日	グループ研究推進・フィールドワーク準備
(夏期休業中)	班別フィールドワーク
8月31日・9月1日	グループ研究推進・フィールドワークのまとめ
9月8日	プレゼン班別指導Ⅰ 講師:ソフトアドバンス株式会社 代表取締役 菅原 亘 氏
9月15日	グループ研究推進・発表準備
10月6日	校内成果発表会
10月10日	プレゼン班別指導Ⅱ 講師:ソフトアドバンス株式会社 代表取締役 菅原 亘 氏
10月20日	公開成果発表会 会場 秋田総合生活文化会館アトリオン音楽ホール 審査員 秋田県立大学 副学長 吉澤結子 氏、秋田県教育委員会高校教育課 英語教育推進班 副主幹(兼)班長 草階健樹 氏、同班国際交流員 Majesty Zander 氏、秋田南GSO(国際教養大学3年) 堀井果乃歩氏、秋田南高校 校長 伊藤 雅和
10月27日	発表会の振り返り
10月29日	京都府WWL高校生サミット
11月24日	論文作成基礎講座
12月14・15日	論文作成
12月18日	全国高校生フォーラム
1月18・19・25日	論文作成
2月1・2・8・9日	論文作成
2月27日	高1国際探究 成果発表会(教室発表)参観
3月16日	1年間の振り返り

※当初予定していたアカデミック・ツアーやは、感染防止のため中止

③高2 総合探究

4月7日	探究活動前年度優秀グループ発表
4月14日	総合探究ガイダンス
4月21・28日	学問分野調査
5月12日	学問分野グループ編成
5月19・26日	研究計画書作成
6月2・9日	研究計画書発表会
6月23日	大学研究室調査ガイダンス 講師:リクルート
7月1日～15日	個人研究推進・大学研究室調査
7月7日	高3「総合探究」代表発表会参観
7月14日	大学研究室調査
9月1・8日	個人研究推進
10月6・13日	個人研究推進・中間発表準備
10月20日	高2「学術探究」公開成果発表会 参観、総探研究テーマ一覧展示
10月27・11月17日	個人研究推進・中間発表準備
12月8日	中間発表会
12月15日	レポート作成
1月19・26日	レポート作成
2月2・9日	レポート作成
3月16日	1年間の振り返り

④高3 学術探究

4月7日	探究活動前年度優秀グループ発表
4月14日	ガイダンス
4月21・28日	研究論文推敲(発信・交流活動準備)
5月12・19・26日	グループ研究推進、実践・発信活動準備
6月2・9・23日	実践・発信活動準備、論文作成
7月2・3日	秋南祭 探究活動展示
7月7日	高3「総合探究」代表発表会参観
7月14日	グローカル・ミーティング in 秋田市役所

⑤高3 総合探究

4月7日	探究活動前年度優秀グループ発表 参観
4月14日	ガイダンス・研究計画作成
4月21・28日・5月13日	研究推進・発表準備
5月26日	クラス発表会
6月9日	探究活動の振り返り、優秀発表表彰
7月7日	高3「総合探究」代表発表会

【外部大会・発表会等】

高2学術探究コースの公開成果発表会にて最優秀賞を受賞したグループが、以下の発表会（オンライン開催）に参加した。

○全国高校生フォーラム

日時 令和4年12月18日(日) 13:00～17:30

場所 会議室よりオンラインにて参加

概要 文部科学省・筑波大学が主催する、全国のWWL校・SGHネットワーク校の生徒のみが参加するフォーラム。参加生徒は、身近な地球規模の課題について研究成果を発表するほか、相互に交流する。

- ・生徒は事前に発表(4分)の動画を送付し、審査を受ける。
- ・当日はオンラインで、事前提出物のうち要約(英語)を用いて発表し、全国の参加生徒たちによる双方の意見交換等を行う。

・グローバルな社会課題研究成果として、優秀な研究発表を行った学校を表彰する(文部科学大臣賞、審査委員長賞、審査委員長特別賞、生徒投票賞)。

・テーマ別分科会は、SDGsに関わるテーマについて、12校程度の生徒ならびに留学生(アジア架け橋プロジェクト)とアドバイザーが参加して、ディスカッションを行う(英語)。

【ラウンド1】問題提起(25分)

【ラウンド2】ブレイクアウトルームでの意見交換(約30分)

【ラウンド3】課題解決へ向かって(自由討議→提言)(約25分)

参加生徒 高2学術探究 3班（公開成果発表会 優秀賞受賞グループ）うち4名

2D 佐々木優太、佐藤一仁、鈴木愛理、福田向里、(サポートメンバー:木村高子、角口わかな)

“KYODO” How About Local Dishes Today?

「郷土料理、今日どう？」



【WWLコンソーシアム構築支援事業「京都府WWLコンソーシアム」】

本校は、令和2年4月より、京都府立鳥羽高校を開発拠点校とする「京都府WWLコンソーシアム」の連携校となっている。これは、世界で活躍できるイノベイティブなグローバル人材を育成するために文部科学省が令和2年度より開始した「WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業」によるもので、これまでのSGH事業の取組の実績等、グローバル人材育成に向けた教育資源を活用し、高等学校の先進的なカリキュラムの研究開発・実践と持続可能な取組とするための体制整備をしながら、高等学校等の国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、テーマを通じた高校生国際会議の開催等、高校生へ高度な学びを提供する仕組み(ALネットワーク)の形成を目指す取組。以下に今年度の取組を挙げる。

①京都府WWL高校生サミット

日 時 令和4年 10月 29日(土) 10:00～16:00

場 所 Zoom によるオンラインで開催し、参加生徒は在籍校から接続

参加校 鳥羽高校、嵯峨野高校、西乙訓高校、東宇治高校、福知山高校、峰山高校、洛北高校、洛西高校(以上、京都府立)、九里学園高校(山形県米沢市)、沖縄県立那覇国際高校、秋田南高校

本校参加生徒 高校2年D組(学術探究コース) 8名

英 語:佐藤弘徳(領域IV)、上田青空(領域V)、飯尾月葉(領域V)、佐藤一仁(領域V)

日本語:佐藤莉央(領域I)、木村高子(領域I)、今野惺琶(領域I)、宮本静(領域II)

内容

「『豊かさ』の価値の再創造による持続的な未来社会の創出」に向けて、在籍校の異なる高校生で構成された少人数のグループ(4名程度)を編成し、以下のいずれか1つの領域に関するテーマについて、各地域・国で課題となっていることとその解決策を交流し、解決策として最も先進的なものや、他の地域・国でも活用できるものはどれかを議論し発表する。使用言語は日本語または英語とし、選択したテーマ及び言語ごとにグループ分けを行う。

領域 I 「文化遺産の戦略的活用による活力ある未来社会の創出」

領域 II 「科学技術と自然が調和する豊かな未来社会の創出」

領域 III 「多文化共生による平和で安心な未来社会の創出」

領域 IV “Creating a vibrant society in the future, making strategic use of cultural heritage”

領域 V “Creating a secure and peaceful society where people from various backgrounds and origins can live together in the future”



②第1回「京都府WWL教員研修」

日時 令和4年7月28日(木)13:30～15:30

場所 会議室よりオンライン参加

講師 大阪大学全学教育推進機構 教授 堀一成 氏

「探究活動におけるアカデミック・ライティングの指導 一鳥羽高等学校の実践を例にー」

概要 WWL連携校の教員を対象としたオンライン研修

内容

- (1)高大連携によるアカデミック・ライティングの指導について概要説明(鳥羽高等学校より)
- (2)生徒作成のレポートを用いた、アカデミック・ライティングの指導について講義・ワークショップ

③「京都府WWLフォーラム」(教員対象のオンライン・フォーラム)

日時 令和4年12月23日(金)13:30～15:30

場所 会議室よりオンライン参加

目的 「未来を創る課題解決先進国の人材育成～京の智から地球の智へ～」をテーマに、日本各地の高校・大学・企業等と協働し、高校生に高度な学びを提供するAL(アドバンスト・ラーニング)ネットワーク
京都の形成および発展に取り組んできた研究開発及び成果について総括するとともに、ALネットワーク京都の事業協働機関から有識者を招き、未来社会に向けた人材育成について学ぶ機会とする。

内容

- (1)京都府WWL 事業の成果報告

- (2)基調講演

講師:総合地球環境学研究所 阿部健一 教授

テーマ:「未来を創る言葉と力:関係価値」

【その他の取組】

①「AKITAグローバルネットワーク事業」GN研究発表交流会

主催 秋田県教育庁高校教育課

日時 令和5年2月7日(火)13:20～15:35 オンライン開催

場所 本校 中等部体育館棟選択教室4よりオンライン参加

参加生徒 高2学術探究コース 希望生徒 6名

安達紗羅、飯尾月葉、佐藤弘徳、塩谷優月、館岡慶和、木村高子

内容:高校教育課「AKITAグローバルネットワーク事業」指定校4校(大館国際情報学院・能代松陽・由利・横手清陵)の各グループが、各校で進めてきた探究活動の成果をオンライン発表する。本校生徒は各校の発表を参観し、質疑応答に参加する(本校生徒は発表は行わない)。

②「ライフプランと地域の未来を考えるワークショップ～秋田南高校探究活動特別講座～」

主催 秋田市(企画財政部 人口減少・移住定住対策課)、株式会社秋田銀行

日時 令和5年3月18日(土)13:00～15:15

場所 中等部体育館棟 大教室(開会行事・閉会行事)、選択教室1～3(テーマ別分科会)

対象 高1・2の希望生徒 計42名

内容 秋田市が進めている、中長期的な視点での移住定住の促進の取組のひとつとして実施する。秋田銀行と連携し、高校生のシビックプライド（まちへの誇りと当事者意識）の醸成を図ることを目的とする。また、合わせて本校生徒の探究活動に関わる特別講座として、地域課題をテーマとした社会人講師による講座・ワークショップを開催し、高校生が各自の探究活動を深めるとともに、自身の生き方・あり方を考える機会とする。講座は3テーマに分かれて分科会形式で実施。

分科会テーマおよび講師

分科会1 【人口】秋田市の人団動向と人口の変化が地域の将来に与える影響について

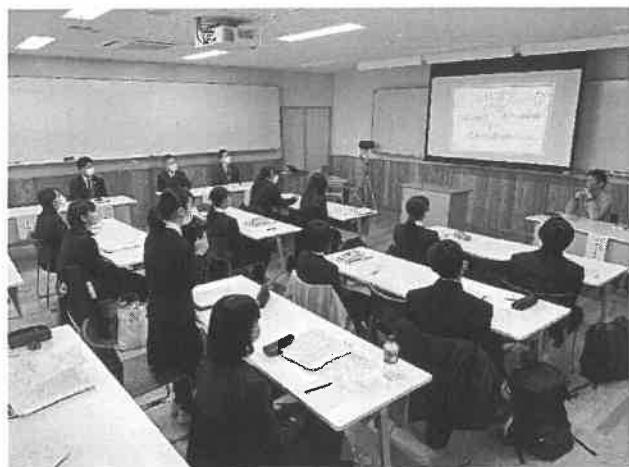
（秋田市 人口減少・移住定住対策課 副参事 佐々木 克也 氏）

分科会2 【産業・人口】市内中小企業が抱える人的課題について

（秋田銀行 地域価値共創部 三浦 千瑛 氏）

分科会3 【移住・定住】就職だけじゃない。起業して秋田を盛り上げよう！

（株式会社141&Co. 代表取締役 元・秋田市地域おこし協力隊 石井 宏典 氏）



【その他】

○WWLコンソーシアム構築支援事業・SGHネットワーク 令和4年度連絡協議会

日時 令和4年7月1日（金）10:30～12:00、13:15～16:00

場所 オンライン開催

参加者 探究活動部主任がオンラインで出席

概要 文部科学省ならびにWWL幹事管理機関である筑波大学が主催する連絡協議会。WWLコンソーシアム開発拠点校やSGHネットワーク参加校が出席するもの。本校は後者として出席。

内容 WWLカリキュラム開発拠点校および地域 AL 拠点機関、SGH ネットワーク参加校の事例発表、文部科学省事務局による事業説明、関係者による意見交換、文部科学省施策説明等

4 秋田県立大学との連携について

今年度、秋田県立大学と本校では、探究的な学習活動に関して連携して研究するとともに各種連携事業を行うことにより、地域の発展に貢献できる人材の育成に寄与することを目的として、連携協力協定を締結した。11月に調印式を行い、小林淳一・秋田県立大学学長と本校伊藤雅和校長が、協定書に署名した。協定の有効期間は2028年3月31日まで(期間満了の1ヶ月前までに双方のいずれかから申し出がない場合はさらに1年間更新とし、その後も同様とする)。

これまで本校の探究活動推進に際して、秋田県立大学からは多大なサポートをいただいていた。このたび改めて協定を締結したことにより、さらに連携を深め、探究活動への研究指導などの支援をいただきながら探究活動を更に深めていく予定である。

○「連携協力協定書」調印式

日 時 令和4年11月15日(火)

場 所 秋田県庁

出席者

公立大学法人秋田県立大学

理事長兼学長 小林 淳一 氏

副学長 吉澤 結子 氏

システム科学技術学部長 水野 衛 氏

生物資源科学部学部長 蒔田 明史 氏

アドミッションチーム チームリーダー 増山 裕 氏

秋田県教育庁 高校教育課

指導主事 山城 崇 氏

秋田県立秋田南高等学校

校長 伊藤 雅和

副校长 深井 裕之

教頭 阿部 雅彦

主幹(兼)事務長 日景 俊也

探究活動部主任 教諭 關 友明



公立大学法人秋田県立大学と秋田県立秋田南高等学校との連携協力協定書

公立大学法人秋田県立大学（以下「甲」という。）と秋田県立秋田南高等学校（以下「乙」という。）とは、次の通り協定書を締結する。

（目的）

第1条 本協定は、甲と乙が探究的な学習活動に関して連携して研究するとともに各種連携事業を行うことにより、地域の発展に貢献できる人材の育成に寄与することを目的とする。

（連携協力事項）

第2条 甲と乙は、前条の目的を達成するため、次に掲げる事項の実施に努める。

- (1) 探究的な学習活動の研究および推進に関すること。
- (2) 高大接続教育に関すること。
- (3) 地域の諸課題の解決に資するための、生徒および学生の相互交流、教員の相互研修に関すること。
- (4) その他高校教育等に関し、必要と認められる事項に関すること。

（連携調整）

第3条 甲と乙とは、この協定による連携の円滑な推進と、連携事業の企画立案及び進行管理のために、それぞれに連絡調整に関する担当部署を定め、必要に応じて協議を行う。

（費用負担）

第4条 連携事業等の実施に伴う費用負担については、両者の合意に基づき、別に定める。

（事故責任）

第5条 連携事業等の実施に伴い人身事故や物損事故が発生した場合の損害賠償責任については、両者協議の上、決定する。

（有効期間）

第6条 本協定の有効期間は、締結の日から2028年3月31日までとする。ただし、期間満了の1ヶ月前までに甲又は乙のいずれかから申し出がない場合は、さらに、1年間更新し、その後も同様とする。

（疑義の処理）

第7条 本協定に定める事項について疑義が生じたとき又は本協定に定めのない事項について必要があるときは、両者協議の上、決定する。

本協定の締結を証するため、本協定書2通を作成し、甲乙署名の上、各自その1通を保有する。

2022年11月15日

公立大学法人秋田県立大学

理事長 今村 浩一

秋田県立秋田南高等学校

校長 伊藤 幸和

令和4年度「総合的な探究の時間」全体計画

秋田県立秋田南高等学校

生徒と学校の実態	<p>校訓</p> <p>獨立自尊 (人に頼らずに自己の人格と尊厳を保つこと)</p> <p>基本理念</p> <p>郷土や国家を支える高い志と国際的な視野を備えたグローバルリーダーの育成</p> <p>教育目標</p> <p>教育基本法並びに教育に関する公法の精神に則り、独立自尊の精神を養い、健全な心身と豊かな個性を育て、郷土・国家及び国際社会の発展に貢献し得る有為な人材を育成する。</p> <p>令和4年度の重点目標</p> <p>高い志を貫き、目標の実現に向けて主体的に取り組む態度を育てるとともに、ふるさとや世界に貢献するグローバルリーダーとしての資質・能力を育む</p> <p>＜グローバルリーダーとして身に付けさせたい3つの資質・能力＞</p> <p>①基礎的知識・技能： 探究や協働の基礎となる力 ②探究力： 主体的に課題を見出し、探究することにより答えを導き出す力 ③協働力： 対話を通じて互いに尊重し合い、良好な関係をつくり、ともに探究・創造する力</p>	

総合的な探究の時間の目標

各教科・科目で身に付けた知識・技能を活かしながら、現代的な諸課題や幅広い学問分野などのテーマについて、グローバルな視点をもって課題解決を目指す協働的な探究活動を行い、成果を地域や国際社会に向けて発信・実践することを通して、グローバルリーダーに不可欠な資質・能力の育成を図る。

探究課題（扱う研究テーマ）	育成を目指す5つの力（重点目標に掲げる「探究力」の具体的な力）
<p>現代的諸課題の解決と学術の探究 ～ふるさとや世界に貢献するグローバルリーダー～</p> <p>《高1 国際探究》 持続可能な社会に向けて、グローバル課題の解決策を提案する。</p> <p>《高2 学術探究》 幅広い社会課題や学術的問題を、専門的にグループで研究する。</p> <p>《高2 総合探究》 自身が将来深めたい学問分野のテーマについて、個人で研究する。</p>	<p>研究結果の発信と提言 社会への還元・実践</p> <p>考え方や思いを伝える力 英語での発表と交流</p> <p>情報の分析と仮説の検証 根拠を明確にして考察</p> <p>情報の選択と収集 コミュニケーションと協働</p> <p>課題意識をもつ グローバルな視点の獲得</p>

学習活動

名称	国際探究	学術探究	総合探究
対象	高校1年生 6クラス	高校2・3年生 学術探究コース 各学年 1クラス	高校2・3年生 総合探究コース 各学年 5クラス
目標	SDGsに代表される現代的なグローバル課題をテーマとして、課題の背景や要因を考察し、論理的に解決策を提案する力を育成する。また、国際社会の多様性や異なる文化などに対する理解を深め、広い視野と課題意識を育むとともに、基本的な探究の方法を身に付ける。	社会や学術の諸問題について協働的・専門的に探究するグループ研究を通して、課題の背景や要因から論理的に解決策を考察して、英語でプレゼンテーションし、また論文にまとめ、成果を社会に発信・還元する力を身に付けるとともに、将来の専門的な研究につなげる。	将来学びたい学問分野についてテーマを定めて個人で探究する活動を通して、その分野の現状や課題を知り、解決に向けて調査・考察を進め、成果をまとめて表現する力を身に付ける。自身の将来の学びや進学先を主体的に考え、具体的な進路選択に結びつける機会とする。
学習内容	<ul style="list-style-type: none"> ガイドンス SDGs講座 探究スキル講座 大学教員等による専門講座 夏休み個人レポート作成 グループ編成、研究テーマ設定 フィールドワーク（現地調査活動） プレゼンテーションセミナー 研究成果発表会 	<p>(2年次)</p> <ul style="list-style-type: none"> グループ編成、テーマ設定 英語でのテーマ発表会（イングリッシュセミナー） アカデミックツアーや現地調査 公開成果発表会（公共ホールで英語発表） 研究論文作成 <p>(3年次)</p> <ul style="list-style-type: none"> 実践・発信活動（グローカル・ミーティング） 研究論文完成 進路実現に向けた実践的活動 	<p>(2年次)</p> <ul style="list-style-type: none"> 個人テーマ設定・学問分野グループ化 研究計画作成 研究テーマ発表会 大学現地調査（オープンキャンパス参加） 中間発表会 個人レポート作成 <p>(3年次)</p> <ul style="list-style-type: none"> 成果発表会（下級生にも発信） 進路実現に向けた実践的活動
指導方法	<ul style="list-style-type: none"> クラスやグループに対する共通の指導。 生徒の課題意識を引き出し発展させる声掛け。 ICTを活用した調査と協働的な活動の充実。 各教科・科目と関連した指導の工夫。 フィールドワークなど体験的な活動の重視。 外部講師によるプレゼンテーションの基礎の指導。 	<ul style="list-style-type: none"> グループ担当教員による対話を中心とした個別の支援。 生徒の課題意識を引き出し発展させる声掛け。 ICTを活用した調査と協働的な活動の充実。 英語科等、各教科・科目と関連した指導の工夫。 外部機関等を活用した専門的・審議的な研究の推進。 多様な表現手法や発表機会の重視。 	<ul style="list-style-type: none"> 教員と生徒との対話を中心とした個別の支援。 生徒の課題意識を引き出し発展させる声掛け。 ICTを活用した調査と協働的な活動の充実。 各教科・科目と関連した指導の工夫。 自身の生き方や在り方を考え主体的な進路選択につなげる指導の充実。
指導体制	<ul style="list-style-type: none"> 学年部教員による指導チームを編成。 クラスごとの講師は担任・副担任が指導。 グループ研究は各グループに担当教員を配置して個別に支援。 フィールドワークは、地域の研究機関や行政機関等、外部に連携し集中的に実施。 プレゼン指導や英語力向上をねらいとした外部講師による講座を実施。 	<ul style="list-style-type: none"> 学年部教員4名による指導チームを編成。 グループごとに担当教員を配置して個別に支援。 大学教員と連携し、メール・オンライン等を活用して専門的な指導を受ける。 フィールドワークは研究機関・グローバル企業等と連携したアカデミックツアーや実施。 府立島羽高校を拠点とする京都府WWLコンソーシアムと連携し、研究の専門性を高める交流や発表の機会とする。 	<ul style="list-style-type: none"> 学年部教員による指導チームを編成。 学年分野ごとに活動場所を設定。関連したテーマをもつ生徒同士が相互に情報交換や発表し合って探究活動を深めようとする。 学年分野ごとに担当教員を配置して個別に支援。 大学や専門機関の研究の動向について、文献調査やインターネット調査の実施。 オープンキャンパス等を活用した実地調査を行う。
学習評価	<ul style="list-style-type: none"> レポート、成果発表等の相互評価の実施。 活動の振り返りやポートフォリオを活用した自己評価の充実。 	<ul style="list-style-type: none"> 各種登録表、研究論文等の相互評価の実施。 活動の振り返りやポートフォリオを活用した自己評価の充実。 	<ul style="list-style-type: none"> レポート、成果発表等の相互評価の実施。 活動の振り返りやポートフォリオを活用した自己評価の充実。

各教科との関連	地域等との連携	中学校や進学先等との連携
<ul style="list-style-type: none"> 各教科・科目の年間計画に、探究活動に活用できる学習内容を明示するとともに、総合的な探究の時間の年間学習計画にも各教科・科目の学習の活用場面を位置付け、教科横断的な指導となるようにする。 探究活動を通して学びの意義を実感させ、各教科・科目の学習に対する意欲と進路意識の向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 実践・発信活動やフィールドワークにて、行政機関や地域の企業・事業所等と連携。成果発表会の参観。 大学教員や社会人講師等による講座や専門的な連携指導の実施。 地域のイベントやボランティア等への参加。 京都府WWLコンソーシアムとの連携。 SGHネットワークを活用した校外での発表機会の充実。 	<ul style="list-style-type: none"> 本校中等部3年生の学校設定教科「クリエイティブサイエンス」での探究活動との連携。 成果発表会等への中等部生の参加。 大学生等、卒業生（秋田南GSO）の活用。 English Village等の講座や研究室訪問等、大学との連携。 学校祭や体験入学・オープンスクール等で研究発表を行い、成果を地域の小中学生や保護者に発信。

高1「国際探究」について

探究活動部 教諭 堀内 純子

1 はじめに

【高校1年生の目標】

SDGsに代表される現代的なグローバル課題をテーマとして、課題の背景や要因を考察し、論理的に解決策を提案する力を育成する。また、国際社会の多様性や異なる文化などに対する理解を深め、広い視野と課題意識を育むとともに、基本的な探究の方法を身に付ける。

2 活動内容

【本年度の活動について】

4月最初のオリエンテーション講座では「探究活動とは何か、グローバルリーダーとして身につけたい資質・能力とは何か」について関先生から講話ををしていただき、高校1年生の最終的な姿を全員で確認しながら、国際探究をスタートした。そして、SDGs 講座や専門講座を受け、関心をもった SDGs のテーマに関する論文を読み、自分の考えをまとめるレポート作成を行った。

夏休み後からはグループ研究が始まり、クラスの垣根を越えて、同じテーマに関心をもつ仲間と活動する過程は、これまで知らなかつた知識を吸収する楽しさだけでなく、自分なりの仮説を立てて解決策を話し合う充実した時間となり、生徒間で生き生きとした化学反応が生じている様子を感じることができた。

フィールドワークでは、県内へは昨年度以上に現地調査に行くことができ、また、県外の企業や大学・研究機関においてもオンラインで見を得ることができ、多くの班で実りあるフィールドワークを実施することができた。また、グループごとに Googleclassroom を作成し、放課後も冬休み期間も、グループ内で意見交流や発表スライドの作成について切れ目なく活動することができた。

中間発表会までの準備期間は短かったが、フィールドワークを通して学んだことを織り交ぜながら、自分たちの探究テーマや問題点、改善に向けた提案策を分かり易く発表していた。中間発表後の生徒の振り返りには、「フィールドワークを通して得た知識は沢山あり、それを存分に活かして、発表に取り組むことが出来たのでよかったです」、「内容の充実さだけでなく、聞いてる人を引き込めるような発表の工夫もしたのでとても達成感があり、今までの探究の成果を存分に發揮できた発表になった」など、探究活動のやりがいに対するコメントが多くあった。さらに、「探究テーマが似ているグループの発



オリエンテーション講座



グループ活動



中間発表会

表は、また違う視点や対策があり、とても参考になった。成果発表会ではさらに深化した研究成果を伝えたい」など、多くの学びを吸収して、次の成果発表会への意欲を高めるコメントが多かった。

答えのない問い合わせに対して、仲間と知識を集約させ、社会がより生活しやすくなるように思考を巡らせ、自分たちなりの提案を伝え合うその姿から、生徒の成長と自信の高まりを実感する1年であった。

3 まとめ

国際探究の前半は、講座を聴く・論文を読むなどの活動を各教室で行った。各担任の特色を出しながらも、同一の指導案とスライドを使って、学年全体での一体感を大切にしながら、探究スキルを高める活動を行うことができた。同じ活動をしていても、得られる知見や思考の深みには当然個人差があるが、特に中入生と高入生との間で差が大きいように感じた。それは、中入生は中等部でクリエイティブサイエンスを経験し、研究する過程の楽しさを体感済みである「経験の差」のように思う。そのため、後半のグループ研究では、できる限り各グループに中入生を混ぜることで、中入生がリーダーシップをとりながら活発な活動に繋げることができた。このことから、中等部のクリエイティブサイエンスの充実が、高校の国際探究の発展に繋がると考える。探究活動の視点からも、中高連携の重要性を実感することができた。

また、毎回の探究活動の最後に、自分の考えや感じたことを Classi ポートフォリオに継続して記録させていた。自分の思考の変遷を客観的に捉えられることから、自己の成長を実感しながら探究活動を進められた生徒も多かったように思う。次年度からは、学術探究コース、総合探究コースに分かれて探究活動を継続していくことになるが、この1年の経験や成長を生かし、さらに充実した探究活動が実施できるように工夫していきたい。

【「国際探究」成果発表会 審査結果】

① 教室発表

優秀班

・7班 「健康面での女性差別を減らす」

1B高橋咲妃・1D堀柚葉・1D小武海櫻友・1E石黒夏菜・1E升屋紗季

・9班 「減らないアフリカのマラリア問題」

1A大石葵・1A菅原望乃・1B川又ゆら・1B佐藤愛優・1B保坂愛来・1D黒澤桜蓮

・38班 「海洋生物に嫌われたい～海洋生物が嫌う物質でのプラスチックづくり～」

1B尾山珠風・1D奥山響・1E高桑煌介・1F佐々木美海

・41班 「2300万匹のサケは戻ってこない」

1A石井巧・1C佐藤煌毅・1D船木美波・1E加藤昊・1F佐藤颯太

・43班 「衣服のリサイクル率を上げる」

1A鈴木大斗・1D佐藤蒼良・1D進藤悠花

②ステージ発表(代表班)

最優秀賞

44班 「食品廃棄物から生分解性プラスチックをつくる」

1B小林章真・1C石井輔・1E伊藤愛里彩・1E佐々木悠空

優秀賞

8班 「HEALTH RECORD OF BABY」

1C登藤優真・1D鎌仲凜・1E錦織伶

三位

16班 「学び×個性に寄り添う学習のフロンティア」

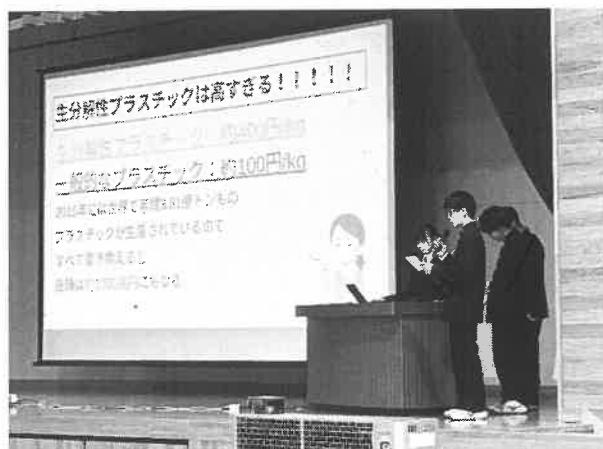
1B進藤雅姫・1D菅野咲香・1D篠原維月・1F高橋輝



教室発表



教室発表



ステージ発表



ステージ発表

高2「学術探究」について

探究活動部 教諭 伊藤 栄治

1 今年度の探究活動

今年度、学術探究クラスは文系生徒20名、理系生徒20名によって編制された。4月、生徒たちはそれぞれの興味関心を共有しながら8つの班を編成し、探究活動をスタートさせた。各班とも最初は、研究論文やインターネット記事、身近な事例に注目しながら自分たちが取り上げる問題を絞り込んでいった。特に、英語でテーマ発表を行ったEnglish Seminarでは、相手に伝わる分かり易い説明を考えたことで問題を精緻化することができた。

その後、フィールドワーク活動やプレゼン班別指導を経ながら問題解決に向けた提案を練り上げていった。

他県の企業や大学等を訪問するアカデミックツアーや実施することができていないが、夏季休業中に各班が行ったフィールドワーク活動では、自分たちが考える問題解決策に対し、具体的な助言やその現実可能性について意見をもらうなど、刺激的な活動になった。

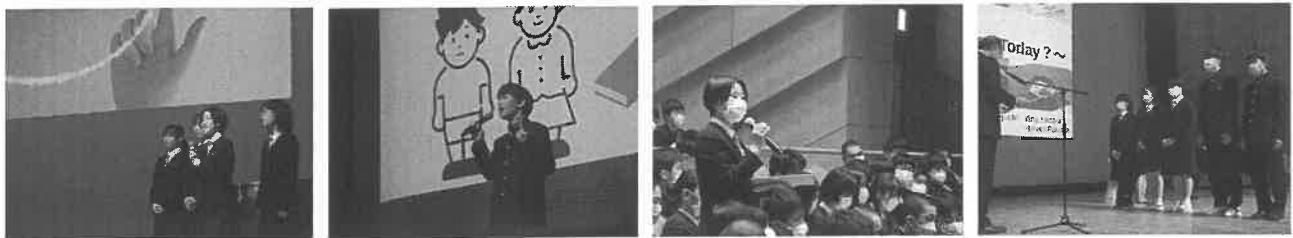
探究活動の流れ

月	主な活動
4月	班編制
5月	研究テーマ発表会
6月	English Seminar
夏季休業中	フィールドワーク活動
9月	プレゼン班別指導①
	中間発表
10月	プレゼン班別指導②
	公開成果発表会
11月以降	論文作成



2 公開成果発表会の実施

10月20日に、秋田県総合生活文化会館アトリオ音楽ホールにおいて公開成果発表会を行った。生徒たちは、これまでのプレゼンテーション指導における助言などを思い出すように、発表ギリギリまで練習に励んでいた。そして、覚悟を決めた表情でステージに立つと、一生懸命に自分たちの考え抜いたプレゼンテーションを披露した。その姿に応えるように、発表後の質疑応答では参観生徒から活発な質問や意見が出された。特に、参観生徒の振り返りには「ひとつの題材をここまで深く仲間と追求し、さらに英語コミュニケーション能力の向上に努める発表が出来るのは学術探究ならではの魅力だ」「私もやってみたいという強い憧れが心の中に湧き出ました」というコメントが寄せられるなど、学術探究コースの生徒だけではなく、学校全体を巻き込んだ事業であることを改めて実感した。



3 「全国高校生フォーラム」への参加

公開成果発表会において最優秀賞に選出された3班の生徒は、12月18日にオンラインで開催された「2022年度全国高校生フォーラム」に参加した。3班は6名の生徒で構成されていたが、規定上4名が参加、残る2名はサポートに回ることになった。

当日は、事前に提出したプレゼンテーション動画についての要約を発表した後、分科会のテーマについてディスカッションを行った。残念ながら3班の発表は賞を受賞することはできなかったが、研究を進めるに当たって事前調査を行って問題を正しく把握することは非常に大事な手法であると高く評価された。

生徒の情報収集能力や分かりやすいスライド作成能力は、入学当時から一人一台のタブレット端末が配布されていることや、日常的に多くの情報の中で生活していることもあり非常に高い。一方で、調べた情報を多角的に検討・処理する力については、伸び代は多分にあると感じている。次年度は秋田市役所等を訪れて、これまでの探究成果を披露、課題解決に向けて協議を行う「グローカルミーティング」が実施される予定である。また、研究論文集の制作も控えている。これらの活動を通して、激しく社会が変わっていく時代においても、「答えのない問題」に対して自分らしく向き合うことができる探究力を育てていきたいと思う。



高2「総合探究」について

探究活動部 教諭 佐藤 裕紀子

1 活動の目標

将来学びたい学問分野についてテーマを定めて個人で探究する活動を通して、その分野の現状や課題を知り、解決に向けて調査・考察を進め、成果をまとめて表現する力を身に付ける。自身の将来の学びや進学先を主体的に考え、具体的な進路選択に結びつける機会とする。

2 活動内容

【概要】

- 4月…ガイダンス、学問分野調査
- 5月…研究計画書作成
- 6月…研究計画書発表会、大学調べガイダンス
- 7月～…個人研究活動
- 10月…研究テーマ紹介ポスター作成、学探発表会補助
- 12月…個人研究中間発表会
- 1月…レポート作成
- 2月…レポート提出



研究テーマ
紹介ポスター



中間発表会

【本年度の活動について】

Chromebook 端末と教室の Wi-Fi 環境を有効に活用して活動を進めることができた。また、その過程で、Google Meet、Google ドライブ、Google スライド、Google Forms などの使用に習熟するとともに、情報リテラシーを鍛えることができた。

中間発表では、個人研究の内容について発表し合い、意見や質疑を交わした。中間発表で得られた意見などを踏まえながら、1年間の活動の成果として個人研究をレポートにまとめた。

また、今年度は、高2「学術探究」公開成果発表会にも主体的に参加することをめざし、個人研究テーマを紹介するためのポスターを作成し会場に掲示したほか、司会や受付、駐輪場整理などの役割を担った。また、成果発表に対する質疑応答にも積極的に参加することができた。

3 まとめ

探究活動を始めるにあたり、生徒の探究活動への期待は大きかったように思う。興味があることについて1年間じっくり調べ理解を深めることができるということは、グループ活動とはまた違った利点があり、生徒はテーマ選択に迷いながらも充実した探究活動を行っていた。基本的に個人活動であるものの、研究テーマに共通性のある生徒が同じ教室で活動することによって情報や意見の交換を活発にすことができた。

今後の課題としては、探究活動から得られたことを進路選択に活かすために、進路指導部との連携、総合探究担当者とHR担任との情報共有が挙げられる。進路の活動である第一志望宣言を計画の中に体系的に組み込み、大学や研究室調べを充実させることによって、より実りのある総合探究の活動にしていきたい。

高3「学術探究」について

探究活動部 教諭 林 克至

1 3年ぶりの「グローカル・ミーティング in 秋田市役所」

学術探究クラスの生徒は昨年に引き続き、それぞれのテーマをより深める活動を行った。昨年度の補足となるが、2年生の3月には「秋田の祭りの継承」を探究テーマとした7班の生徒が、「WWL・SGH×探究甲子園2022」(これまでの「SGH甲子園」)の予選を通過し、オンラインによる発表を行うなど一定の成果を挙げている。

3年生は入学時から新型コロナウイルス拡大防止の観点から、様々な制約を受け入れてきたが、今年度は3年ぶりに「グローカル・ミーティング in 秋田市役所」が開催された。実施に際しては、企画調整課の西村さんらのご協力のもと、本校7班に対して17名の職員の方々が対応してくださいました。各班生徒はそれぞれに探究成果や課題解決に向けた独自の提案を発表したうえで、テーマに関する専門的な知識を有する職員の方々と意見交換を行った。現状把握や認識の甘さ、さらには、提案内容の稚拙さなどを指摘された場面も見られたが、生徒たちは自分たちに足りない部分に気づかされながらも、班としての意見や個人としての意見を出し合うことで、新たな知見を獲得した様子であった。

当日は秋田魁新報からも取材を受けた。後日の記事には市役所の方々の感想として「高校生の視点を生かして都市の課題を分析し、論理的な提案がされている」や「今後も引き続き、若い視点を大切にまちづくりに関わってもらいたい」などの言葉が紹介された。

2 「グローカル・ミーティング in 秋田市役所」後の生徒たち

7月末には昨年の公開成果発表会で「秋田の農業を未来につなぐ」のテーマで3位入賞を果たした5班の生徒が、秋田ユネスコ協会主催の「高校生のためのユネスコ国際理解ユースセミナー」で基調プレゼンテーションを行い、農業関係者や農業高校の生徒と意見交換を行った。このセミナーも数年ぶりの開催であり、他校の生徒に向けたプレゼンテーションに最初はやや緊張していた生徒であったが、意見交換時には周囲とすっかり打ち解け、相手校の生徒から本県の農業の歴史や現状を教示してもらうことで、これまでのフィールドワークや秋田市役所訪問とは異なる学びを得ることができた。

夏休み以降は、2年生から継続してきたこれまでの探究成果を論文としてまとめてることで、論理的思考力や文章表現力を高めた。入学当初のコロナ期に県から支給された一人一台タブレット端末の影響もあり、これまでの論文と比較して、目に映える図表やグラフを複数掲載した論文が散見されるようになった。今後は多くの方々との意見交換や議論に自信をもって臨み、一つの見方や考え方へ固執することなく、他者の意見を柔軟に取り込みながら、より良い解決策を模索してもらいたいと願っている。



WWL・SGH×探究甲子園で
オンライン発表する7班



長寿福祉課の方に
成果発表する4班の生徒



都市計画課の方と
意見交換する6班の生徒



学校教育課の方が
中学時代の恩師でした



ユネスコ国際理解セミナーで
代表発表する5班の生徒

令和4年度 高3「総合探究」を振り返って

探究活動部 教諭 木村 太郎

1 はじめに

【活動のねらい】

各教科・科目で身に付けた知識・技能を活かしながら、自らが将来学びたい学問分野をテーマとした個人での探究活動を行うことを通して、グローバルリーダーとしての資質・能力を育成する。また、関心のある学問分野について見識を深め、将来の学びや職業選択に活かす。

2 年間計画・活動内容

【活動内容】

①4月 ガイダンス・研究計画作成

今年度の活動のねらいや活動計画を確認し、9月までの活動計画の見通しを立てた。

②4月～5月 個人研究推進・発表準備

昨年度作成したレポートについて、内容の補足や不十分な点の調べ直しを行い、さらに深まったレポートの作成を目指した。昨年度クラス代表となった高3の先輩方の発表をリモートで参観していたこともあり、明確なイメージを持って発表スライドの準備を進めることができた。

③5月 クラス内発表・代表選考

各クラスで、2時間続きで発表を行った。最初の1時間、5～6人の班に分けて、それぞれの班内で発表し、意見交換を行った。次の1時間、班員を入れ替え、同様に発表・意見交換を行った。2時間の発表会終了後、発表を聞いた中で良かったと思う2名に投票し、得票数の多かった6名を7月の代表発表生徒として選出した。

④6月～7月 研究推進・スライドデータ提出・活動の振り返り

クラスで発表後、最終的な修正を行い、スライドデータの提出をもって探究活動を締めくくった。振り返りの活動では、これまでの探究活動を振り返ることで、自分自身の成長を確認するとともに、今後の進路にどう生かしていくかを考えた。代表生徒には、学年集会で表彰状を渡すとともに、最終発表会に向けての激励を行った。

⑤7月 最終発表会

代表に選出された30名が、高3の5教室を使って発表を行った。高3学術探究コースの生徒および高校1・2年の全生徒はリモートで参加した。発表者はこれまで重ねてきた研究について堂々と発表し、中には英語での発表を行う生徒もいた。リモート教室からも積極的に質問があり、質疑応答を通して互いの学びを深めることができた。

3 まとめ

自分自身が興味ある学問分野について時間をかけてじっくり調べることのできる総合探究は、進路選択に向けてとても意義のある活動であると感じた。また、この活動を通して、本校が目指す、グローバルリーダーに求められる3つの資質、5つの能力を高めることができたのではないかと思う。昨年度の反省点を生かし、最終発表会を7月に行つたことで、夏休み前に総合探究の全活動を終了し、夏休みを進路に向けての学習に向かわせることができて良かった。

【最終発表会 代表発表者一覧】

- 淺川謙友「数学的パラドックスについて一大円と小円の周の長さー」
油川勇太「自己学習について」
河田宇宙「マインドフルネスで変える」
佐藤翔太「ヤモリの可能性」
鈴木峻平「教員について」
田中快「人類の地球外移住について」
大高美空「音楽療法の現状とこれからに向けての提言」
金奏貴「音源分離による楽曲の分解」
佐藤里咲「作業療法と音楽療法の関わり」
長岐ひかり「頭を良くする方法—脳科学的に『頭が良い』ってどういうこと?ー」
長谷部旭「東北の再生可能エネルギーの可能性」
松浦拓実「CAD、CAD-AI導入による、北海道・東北地方の医師不足状況の改善に関する考察」
臼井陽香「デザイナーベイビーのは非」
柏木心寧「品種改良で日本の農業の問題を解決する」
佐々木悠惺「触覚情報の記録・再生可能端末の開発について」
佐藤こなみ「高校生アスリートのための栄養の摂り方」
後藤真白「SNS炎上と法的措置」
鈴木健友「自動運転と刑法について」
赤井藍「いじめにおけるアフターケアの仕方ー加害者へのアプローチ」
伊藤幸陽「現代の正義について考える」
加藤すみれ「秋田を都会にする企業」
萩野勝英「日本の教育におけるサブカルチャーの果たす役割」
原田凌羽「地方プロスポーツの経済的な役割」
三浦光太郎「政治地理学から見るグローバルブリテンの実現性」
小原深愛「日本の「高校」における第2外国語教育」
小林未迪「脱ハンコの実現ー多様な働き方に対応するためにー」
武田耀子「コミュニケーションと日本人の課題」
千葉夢翔「セルフコントロール力」
内藤蓮「地方ローカル局の存在意義」
古山夏乃「オンライン通販でのコロナ禍による購買意欲への影響」

【生徒の振り返りより】

- ・自分が生活する中での問題点や疑問点を記録し、それに対する自分なりの意見や根拠を持つことで、その分野に関することにさらなる興味を持った。
- ・話すときの時間配分など、全体を見たときの客観的な考え持てるようになった。また、様々な質問に備え、柔軟な対応ができるようになった。
- ・問題の表面的な原因だけでなく、根本的な原因から様々な事柄と関連づけながら解決策を見出して、再度自分や同じテーマを持った友達と意見を共有することが出来た。
- ・行きたい学科で取れる資格(認定資格)等々が様々あると知り、より将来の可能性が広がった。また、なりたい職業の良い面も悪い面も理解がより深まったので、自身で判断しながら未来について考えていきたいと思う。
- ・先行研究や資料をいろんな視点から見つめて、客観的に考えることができるようになった。また、相手にいかに伝わりやすくプレゼンするかを考える発想力を身につけることができた。
- ・課題に対して深く考え自分の意見を何度も推敲することで理想のアイデアに近づける方法を身につけた。また、自分の意見に否定的な意見を出されたときに、排除するのではなく言われたことを検討して発表に反映させることもできた。
- ・地元秋田を活性化するために自分にできることは何か考えたり、将来の夢や目標を明確にすることができた。

【活動の写真】



各教室でのガイダンス(4月)



タブレットを使用してのクラス内発表(5月)



最終発表会での発表(7月)



最終発表会での質疑(7月)

今年度のクリエイティブサイエンスを振り返って

教諭 工 藤 道 人

1 はじめに

クリエイティブサイエンス(以下CS)は本校独自の教科として、「日常生活や社会との関わりなどから数学や理科に関する課題を見付け、探究的な学習のプロセスを通して課題の解決に取り組むことで、数学や理科への関心を高めるとともに、科学的な思考力や表現力を養う」ことをねらいに、中3生が週1時間行っている。今年度が実施5年目の教科である。

2 今年度のCSの進め方

昨年度までの実施状況を基本としながら年間学習計画(案)を作成し、さらに、本年度の年間行事予定を踏まえて調整を図った。

1 指導体制について

生徒の課題研究に対する指導は、数学分野6名、理科分野7人、計13人が担当する。また、中等部数学科主任と理科主任は、CSの全体計画やガイダンス・発表会等の企画・運営を行う。

2 通常の授業について

①授業は、全クラス水曜日5校時に行う。ただし、11月の中間発表会、1月の校内発表会前は、CS日課(昼休みのうちに帰りの会を行い、5校時終了後も続けて活動できるように日課を変更)とする。

②3クラス同時展開で、学級を解体して授業を進める。各分野でグループを作り、課題研究を進める。生徒の内訳は、数学分野40人、理科分野40人(物理8、化学16、生物8、地学8)。4~5人で1グループをつくることを想定している。

③ガイダンス等、80人が同時に同じ内容を行うときは、中等部棟大教室やアリーナで行う。通常、数学分野の生徒は中3の3教室、物理分野は物理実験室、化学分野は中等部理科室、生物分野は生物実験室、地学分野は地学実験室で行う。また、中等部PC室を開放するとともに、教室に保管されているタブレットを用いて必要な情報の収集や発表資料の作成等ができるようとする。

3 学習成果(研究成果)の発表について

11月に中間発表会、1月に最終発表会を実施する。中間発表会は3年生の生徒の相互参観のほか、今年度は中等部1、2年生にも参観してもらう。最終発表会は中等部1、2年生のほか、高校生、保護者にも参観してもらう。中間発表会はポスター形式、最終発表会はプレゼンテーションソフトを使っての発表とし、いずれの発表会も発表時間は10分、質疑応答5分とする。担当の先生には、研究に対する助言、指導のほか、プレゼンテーションの指導もお願いする。なお、最終発表会は例年本校中等部アリーナを会場として行っており、年度初めの計画でもそのように実施する方向で確認したが、年度途中で会場を「あきた芸術劇場ミルハス(中ホール)」にするとともに、名称も「クリエイティブサイエンス学習成果発表会」に変更することにした。

4 評価について

これまで同様、前期と後期の2回、観点別評価を行い、通年で5段階の評定を行う。評価の観点は、「数学や理科に関する課題を設定し、課題の解決に向けて意欲的に取り組んでいるか(数理探究への関心・意欲・態度)」「探究的な学習を通して、事象を論理的・実証的・客観的に考察したり、表現したりするなど数理的な見方や考え方を身に付けているか(数理的な思考・表現)」の2つとする。

5 学習計画について

一年間のおおまかな流れは、「ガイダンス→テーマ設定→課題追究→中間発表→課題追究→校内発表→研究レポートの作成」となる。週1時間(年間35時間)の授業のほか、必要に応じて長期休業中の活動も行うこととする。なお、年度初めの活動がスムーズに進むように、昨年度(令和3年度)内にCSについての簡単なガイダンスと希望分野調査を実施した。

◎ 年度当初の学習計画

月	単元（題材）と時数	主な学習活動	※学習形態
4	○ガイダンス（1時間） ○課題研究の進め方（1時間）	○1年間の学習(研究)の流れの確認 ○テーマの選び方（探究方法や事例について学ぶ）	※全体 ※分野ごと
5	○課題研究の進め方（1時間） ○課題研究I（テーマの調査、探究活動にむけての準備）（2時間）	○テーマ設定（グループテーマの設定） ○グループ研究（情報収集）	※分野ごと ※研究グループ
6	○課題研究I（テーマの調査、探究活動にむけての準備）（3時間）	○グループ研究（情報収集）	※研究グループ
7	○課題研究II（予備実験・研究）（3時間） 〈夏休みの研究〉	○グループ研究（実験、観察、情報収集）	※研究グループ
8	（※8月は授業日なし）		
9	○課題研究III（本実験・研究）（4時間）	○グループ研究（実験、観察、情報収集、および、収集したデータや情報の考察、検証）	※研究グループ
10	○中間ポスター発表会に向けた準備（4時間）	○ポスター制作と発表練習	※研究グループ
11	○中間ポスター発表会（2時間） ○課題研究III（本実験・研究）継続（2時間）	○発表 ○グループ研究（再実験、収集したデータや情報の考察、再検証）	※全体 ※研究グループ
12	○課題研究IV（まとめ）（1時間） 〈冬休みの研究〉	○グループ研究（再実験、収集したデータや情報の考察、再検証）	※研究グループ
1	○校内発表会に向けた準備（3時間） ○中等部校内発表会（6時間）	○発表資料の制作と発表練習 ○発表	※研究グループ ※全体
2	○課題研究V（補充・修正・まとめ）（2時間）	○課題研究レポートの作成	※研究グループ

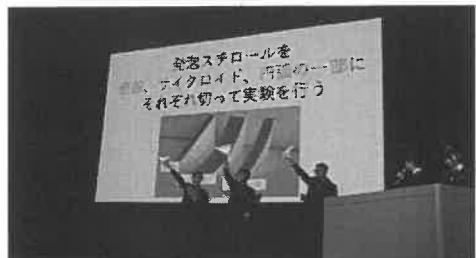
3 中間発表会

11月2日(水)の5、6校時に、中等部3年普通教室と中等部理科室を会場に実施した。どのグループも4月から約6ヶ月間の研究成果を模造紙大のポスターにまとめ、堂々と発表することができた。生徒たちは理科室前廊下に掲示してある昨年度のポスターも目にしていて、折に触れるポスターを参考にして活動を進めることができた。また、今年度は中等部1、2年生にも参観してもらった。3年生の発表に熱心に耳を傾け、質疑応答では鋭い指摘や質問を3年生に投げかける場面も見られた。それに対して3年生も回答に戸惑う場面も見られたが、一つ一つに丁寧に回答している姿が見られた。中間発表会を通して、新たな発見や課題が見つかったり、プレゼンの仕方を学んだりできたとともに、参観した1、2年生にとってCSに対する関心を高めることができ、中等部生にとって大変有意義な発表会であった。



4 ミルハスでの学習成果発表会

1月26日(木)にこれまでの学習の集大成となる最終発表会を、あきた芸術劇場ミルハス中ホールで実施した。初めて校外で実施するということで、生徒も担当者も緊張感をもって本番当日を迎えた。今年度の発表会は、①中等部1、2年生に終日参観してもらう、②中等部3年の保護者だけではなく、中等部1、2年生の保護者にも参観してもらう、③司会進行を生徒に任せる、以上3点を変更して行った。また、ステージ上では可能な限り原稿を見ずに発表することも伝えた。中間発表会以降、この発表会に向けて授業の他、放課後や冬休みも研究に励んで本番を迎えたが、どのグループも堂々とこれまでの研究成果を発表できた。



以下は、発表、参観した生徒、保護者の感想の一部である。

- 仮説、実験、考察の手順がはっきりしていて、どのグループも分かりやすい発表であった。質問によって、さらに学びが深まったと感じた。(中3生)
- 全体的に、実験や計算を繰り返して、論理的な結論をまとめている班が多いと感じた。次の研究では、先を見通した計画を作ることから始め、メンバーとの議論をもっと活発に行いたい。(中3生)
- 身のまわりには、数学や理科を活かせるものがたくさんあると思った。自分たちの研究も含め、まだ研究しきれていないことや新たな課題があると思うので、今後さらに詳しく考えてみたり、身のまわりの現象について興味をもって調べてみたい。(中3生)
- 課題に対して履修の範囲を超えて勉強している班もあり、主体的に学習を深めるよい経験を積んでいるのだと思った。(高3生)
- どの班も質疑応答の時に分からぬで済ませるのではなく、班員で話合い、班で出せる最高の答えを出し、レベルの高さを感じた。(高3生)
- 絶対一生使わないと思っていた関数から感動をもらったりして、数学ってすごいと感心させられました。今まで習ったこと、さらに新しく学んだことをフル活用して、自分達で設けた課題の解決に奮闘したのが伝わってきました。来年、こんなハイクオリティな発表をさらに超えられるよう、苦手な理系の勉強も精進します。(中2生)

○ほとんどのグループが、難しい数式や複雑な実験を行っていて、正直、来年度本当に自分ができるか不安になった。しかし、難しいところは分かりやすく、かつ、面白く発表する先輩方を見て、私もこのように分かりやすく伝えて同じ気持ちになってほしい！という気持ちを持てた。来年度はグループのみんなで助け合って、中等部生活の集大成、そして思い出になるプレゼンを作れたらいいなと思った。(中2生)



○「よくこんな方法を思いつくなあ」「こんな数式で求められるんだ」など、とても感心しました。また、課題に対して、実験を手順よく行い、そこから考察し、新たな実験を重ね、課題を解決していくところがすごいと思いました。(中1生)

○発表の仕方が工夫されていて、パワーポイントにまとめるのも上手だと思いました。中1ももうすぐ発表する機会があるので、この発表会で学んだことを生かしたいです。(中1生)

○生徒たちがそれぞれ、今自分達が気になること、調べたいことを一生懸命試行錯誤して研究したことが伝わり、感心しました。中3生の知識や方法ということもあります、まだまだ研究方法や考察に甘さが感じられるところも多々ありましたが、等身大の一生懸命さがよかったです。質問にもしっかりと対応していて、質問する側も立派でした。(保護者)

○楽しく学んでいる姿がとても良いと思いました。全ての学びの中に、喜びや楽しさがあると子供達が自ら気付き、これから的人生をより良くする糧として、今回の発表会を活かしてほしいと思いました。(保護者)

5 今年度のCSの成果と課題

【成果】

○今年度で5年目となり、各教員が見通しをもって指導に当たることができた。また、生徒もこれまでの先輩方の姿を意識して、よりよい研究をしようと一生懸命探究活動に取り組む姿が見られた。

○昨年度に生徒一人に一台のタブレットが支給されたが、情報収集、写真や動画の撮影、プレゼンテーションや原稿の作成のため積極的に活動場所へ持ち運んで使用し、活動を進めることができた。

○今年度も、数学分野のグループには、一般財団法人理数教育研究所主催のMATHコン(=算数・数学の自由研究)に向けてのレポート作成を夏季休業中の課題とした。数学分野全7グループが応募して、そのうち3グループが秋田県優秀賞を受賞した。

○学習成果発表会をミルハスで実施したことにより、発表会までの研究、プレゼン資料づくり、発表練習など、熱心に取り組んだ。発表はどのグループも工夫されており、参観者からも好評であった。また、進路の決定した高校3年生に学習成果発表会を参観してもらった。直接高校3年生から、研究の進め方や発表の仕方などについてのヒントやアドバイスをもらったことで、探究活動に対しさらに意欲を高めることができた。

【課題】

▲今年度は、行事等の関係で授業時数が当初の予定より少なくなってしまった。その影響で、放課後に活動せざるを得ないグループもあった。やむを得ない部分もあるが、可能な限り授業時数を確保して、過度に生徒の負担にならないようにしたい。

▲グループによって、テーマ決定までにかかる時間に差がある。生徒達の自主的な探究活動であるが、教師側の指導をある程度加えていく必要がある。

▲(今年度も)自身の学年の指導など、CS以外にたくさんの業務がある中、担当教員の負担が大きい。

編 集 後 記

令和4年度は本校創立60周年となる節目の年でした。その記念式典をはじめとする様々な関連事業を滞りなく、無事にやり終えることができ、各担当の先生方もほっと一息ついていることと拝察します。また、各事業において主役として取り組んだ生徒一人一人の活躍には目を見張るものがありました。外部の方々からも、そのような南高生・中等部生に対してお褒めの言葉をいただき、とてもうれしく感じているところであります。

高校1年生から新学習指導要領へ移行されたことに伴い、本校(高校)では月曜日を加えた週3日の7校時授業が開始となりました。授業を受ける側(生徒)に加え、教える側(教師)もなかなかペースがつかめない様子が見られましたが、そんな中でも積極的に授業改善を図っておられる先生方は少なくありません。試行錯誤しつつも、新学習指導要領の勘所を押さえた指導がさらに進んでいくものと思われます。それを通して、生徒たちにもしっかりした学力が身についていくものと確信する次第です。

コロナ禍となって3年以上の月日がたちましたが、依然としてその影響が学校生活の様々な場面に及んでいます。ただ、いい意味でコロナに慣れた部分もあり、例えばリモートを利用した学校行事の運営は完全に一般的となっているほか、学年閉鎖時のリモート授業にもスムーズにあたることができました。コロナ禍によって学校教育が大きな制約を受けたことは間違ひありませんが、そのことが学校教育の変革を促しているようにも感じます。教師が常に研修を積み重ねていかなければならぬゆえんがここにもあるようです。

本研修収録には、先生方の研修や取り組みの成果が載せられております。今後の我々の教育活動に本研修集録が役に立てるなら幸いです。

最後になりますが、忙しい中、快く本研修収録に寄稿していただいた先生方に感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

令和5年3月 教育研究部 佐藤寿志 記

令和4年度 研修集録49

発行日 令和5年3月27日

発行者 秋田県立秋田南高等学校
秋田県立秋田南高等学校中等部

〒010-1437 秋田市仁井田緑町4番1号

TEL 018-833-7431

FAX 018-833-7432